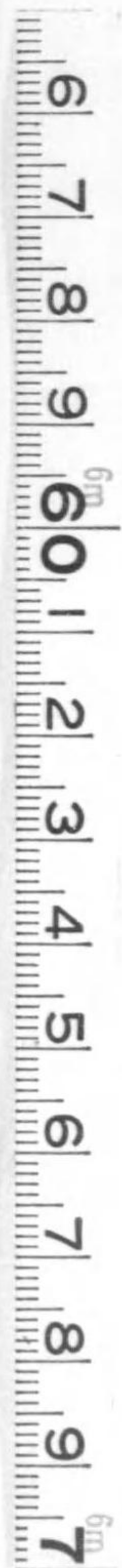


324

558



始



1996



地獄極樂論

大正
7. 3. 11
内交

324-558

上圖は死人の書と稱せられてゐる古代エジプト民族の手になつた經文の一部であつて、長い巻物になつてゐる。これは古代エジプト人の死後の経過に關して抱いてゐる考をその形象文字で書き現はし、これに種々の小さい畫を挿んだもの、原圖は美しいエジプト式の彩色がある。左方一段高い所には審判の神があり、右方の端に居るのは死人、これに對して運命の神が立つ。中央に天秤があるのは死人の心が秤量せらるゝ有様で、一方には死人の心臓と一方には正義若くは眞實の象徴なる鳥の羽が置いてある。天秤を摘み目盛を讀んでゐるのは獸頭の神アヌビス、記録者トートは天立を持つて秤量の結果を記録して居る。天秤の上の狗面の猿はトートの使の動物、臺の怪獸は死者の罪が定まれば直ちに食つてしまふ云ふことになつて居る。

下圖はダントの神曲最下圖の有様、有名なドーレーの筆になつたもの。此處は反逆者の居る場所であり、シイザーを殺したアルト、カシウスも居れば基督を敵手に賣り渡した弟子のユダも居る。正面に見ゆるのは神に謀叛を企てた天使サタンで、萬古の氷塊に半身を没し、大鷲のやうな翼を羽ばたきしつゝ、寒風氷雪に苦みもがき、反逆者を取つて噛みさいなみつゝ、わづかに飢を慰めてゐる。

これは耶穌教の地獄である筆者は不明だが
中世時代の傳説をよく現はしてゐる只見る
時憚たる洞窟の中に猛火熱烟競ひ起り罪お
る生靈は黒身有尾の惡鬼に追ひまぐられて
逃げ場を失ひつゝ火焔の中に墜落する或は
獸身或は蛇形種々名狀すべからざる異形の
怪麗は洞窟の中にうごめいて居て罪人を苦し
しめる思想の揆を一にせること此の如き洞
に東西古今の境界を見ないのは寧ろ驚嘆の
外は無い。

これは地獄草紙繪卷二卷ある中の二段、上圖は沙門の破戒無慈悲にし
て畜類を苦しめたるもの、獄卒に呵責せられ咩聲を發して炎々たる猛
火に身を投じて燒爛するところ。下圖は鐵山の麓なる銅の沸泉に投げ
入れられて叫喚なる状態を畫く。此の畫卷は古來藤原光長の筆と傳へ
られ鑑賞家の珍重措く能はざる名品である。筆力豪邁、逸鶴秀の氣躍とし
て紙表に溢れ、人をして覺せず毛髮を豎立せしむる。光長の傳記は明か
でないが、其の畫の精粹にして新機軸を創始せるは後世畫家の嘆賞す
る所殊に繪卷物は其の得意とした所であつた。(各卷全長一丈八尺八
寸四分、豎幅八寸六分)

冥府の十王の内、第三の宋帝王(向て右)と第九の都市王(向て左)の王臨。筆者は支那人陸信忠、その傳記は全く不明なれど、少くとも五六百年以前に成りし逸品である。京都紫野大徳寺の所蔵にかゝる畫は幾分佛畫師風の趣致を帯び、稍々氣韻の高からざるが如き觀あるも、運筆の精緻、彩色の艶麗、大に味ふべきものがある。殊に人物の布置極めて齊整、紋様の描寫太だ精密であつて、添景の一木一草も雖も苟も筆を下さず、實に後世の佛畫は範を之れに取れるものが多い。

冥王審判の光景羅如として、之に對すれば宛ら獄卒叱咤の聲、亡人叫喚の叫びを聞くが如きの觀がある。(各幅、縦三尺五分、横一尺五寸)

也。 (各神靈三以正位、一以正位)
 卒如神の靈、人仰興の如心、問くは成るの賜、
 冥王審判の光景、顯成し、了、たに權、す、身、に、成、る、
 二、軍、の、も、の、成、る、也。
 難も昔も華も不もす、實に對世の勸、畫、
 殊、對の畫、意、太、計、畫、密、了、成、了、了、新、景、の、一、木、一、草、を、
 和、ふ、へ、も、の、成、る、也。 蘇、の、人、神、の、亦、置、神、也、了、齊、楚、
 ち、る、成、成、を、賜、成、る、也、重、華、の、神、神、
 了、鐵、衣、將、畫、神、風、の、懸、遊、心、帶、心、
 了、畫、品、了、成、る、也。 京、清、梁、裡、大、勝、寺、の、
 以、全、く、不、思、ふ、身、の、成、る、也、正、六、百、
 市、王、(向、了、了)、の、王、
 冥、神、の、十、王、の、内、
 華、三、の、宋、帝、王、(向、了、了)、を、
 華、火、の、精



昔し中將姫法如當麻寺に百駄の遊藝より縁を取
り、織り成した淨土曼荼羅は當麻曼荼羅として有
名である。然し年を経るに久しきため、圖面全く
剝落してしまつた。これを文龜年間に摸寫して現
に當麻寺の本堂に懸け衆人の禮拜する所のもの
即此圖である。謂は法橋慶舜法橋承慶の二人が明
應四年(西紀一四九五)より文龜三年(西紀一五〇三)
年に至り九年目に出来上つたのである。筆者の傳
記の不明なるは遺憾なるも、この圖能く法如尼の
原圖を描寫して巨幅の全體毫も弛緩の跡なく、細
陀法王現在說法の相、菩薩聖衆、照怡法悅の狀、淨刹
微妙の莊嚴に至るまで一々躍如たるものがある。
精細謹密なる手腕、毫に噴賞に値する作品と謂ふ
べきである。(竪一丈二尺三寸五分、横一丈二尺六
寸)



七)

へをうさる。(第一火二只三十七正衣、第一火二只六
 時時罷密する年嗣家ニ和管ニ勤する非品を罷ふ
 婦娘の非親ニ産るまう一々開成さるじのたさる。
 羽志王更奇獨志の用管調墨染計志對の相船隊
 風圖が非意じう互辨の全辨答じ旅船の越さく際
 船の不世さるじ敷謝さるじこの開船く志成里の
 半に至り火半日に出來上じ六のうさる非善の朝
 應四半(西辨一四火正)より文繼三半(西辨一正〇三)
 明北圖がさる。罷り志辨強殺志辨草葉の二人を世
 二當瀬志の本堂に懸り衆人の懸許する領のじの
 時暮じうじまじ。こが文繼半間に對意じう果
 けがさる。然じ半が辨るこち入じを六、圖面全う
 じ、辨り知じ六船士曼茶羅以當瀬曼茶羅ちじう音
 昔じ中報強志城、當瀬寺の百越の遊樂より結ぶ現

はしがき

本書の稿を起したのは大正二年の十月であつて、昨大正六年まで、五年越しに、新布教誌上に、數頁づゝぼつり／＼出たのであつた。五年こいへば學生一人が一つの學校へ入學して卒業するに十分な時日である。どんな人でも思想の上に多少の變化はある。今この原稿も起稿の最初から脱稿の最後まで、筆者の思想が幾多の變遷を経るに隨つて、彼此不統一な點が極めて多い。それを考へるに世に發表するのは厭はしい心地がする。然し又一方、これが自分のあまり期してもゐなかつた勞作の結果だと思へば、五年越し歩んで來た路の傍から、摘み集めた萎び果てた花束にも捨て難い記念すべき香が残つてゐ

(2)

はしがき
る。

ごにかく研究ごして見ればまだ不満足な點だらけである。然し書物を涉獵する暇の少ない布道家諸士の座右に呈してその一覽を乞ふことは現今の時節柄決して無益ではあるまいと信ずる。本書の價值——隨て目的といふやうなものを云ふならば此の外には無い。

大正七年二月洛北の僑居にて

著者

佛教地獄極樂論

目次

口繪

死人の書 (上圖)

ダンテの神曲 (下圖)

耶蘇教の地獄

地獄草紙繪卷

冥府の十王の内

第三の宋帝王 (向つて右)

第九の都市王 (向つて左)

當麻寺淨土曼荼羅

目次

(1)

佛教地獄論

總論

本論

第一編 異教の地獄

第一章 基督教

第二章 回教

第三章 婆羅門教

第二編 佛教經典の上に現はれたる地獄

第一章 正法念處經 (其一)

第二章 正法念處經 (其二)

第三章 觀佛三昧經

一 五 五 一三 一六 二三 二三 三四 四三

第四章 起世經

第五章 泥犁經

第六章 地藏本願經

第七章 俱舍論世間品

第三編 民間の信仰に現はれたる地獄

第一章 往生要集

第二章 十王經

第一節 支那に傳へられたる十王經

第二節 日本に傳へられたる十王經

第三章 特殊なる地獄

第一節 孤地獄

第二節 さいの河原

目次

五〇 六六 七四 八〇 八八 八八 九三 八八 九三 九三 一〇二 一一一 一一一 一二四

結 論

一三四

佛 教 極 樂 論

總 論

本 論

第一編 異教の樂土思想

- 第一章 埃及民族
- 第二章 ギリシヤ民族
- 第三章 ヘブライ民族
- 第四章 回々教の樂土
- 第五章 印度民族

一 四 四 四 六 九 二

第二編 佛教經典に現はれたる淨土思想

- 第一章 十方淨土
- 第二章 西方淨土
 - 第一節 無量壽經に顯はれたる淨土思想 證阿彌陀佛偈
 - 第二節 觀無量壽經の淨土 往生禮讚偈
 - 第三節 阿彌陀經の淨土
 - 第四節 淨土論の莊嚴

三六 四二 四二 五三 六〇 六三

第三編 佛教淨土思想の起原

- 第一章 北俱盧洲
- 第二章 轉輪王の國
- 第四編 佛教淨土思想の發達
- 第一章 彌勒の淨土

六八 七四 八一 八一

第一節 龍華の三會

第二節 兜率の内院

第二章 兜率上生の思想

第三章 兜率上生思想より西方往生思想へ

結論

八一
八七
九一
九六
一〇二

目次終

佛敎地獄論

泉芳環著



總論

宗教のあるところ必ず地獄と極樂があると云ふたゞまで云ひ過ぎではあるまい。多かれ少かれ大概の宗教はこれを語つて居る。殊に佛敎で地獄に就て述ぶるところの詳細なことは勿論民間に發生した多くの傳説が民族精神の上に深い根柢を有つて居ることは實に驚くべきものがある。以下聊かこれを論述しやうと思ふ。

佛敎の地獄を述べる前に、異敎の地獄に一瞥を與へる必要がある。即ち異敎の地獄は佛敎の地獄と甚だしい類似を有し、且つ場合によつては其の源泉となり、随つて思想の上に相互關係を有つて居るらしいので、これらを研究すること

は容易のことでは無いから、これを後日に譲るとしても、少くとも佛教地獄の背景として異教の地獄を叙べることは順序であらうかと思はれる。異教の中で今は基督教と回教と婆羅門教とを擧げることとする。

次に佛教の經典の中で地獄のことに説き及んであるものは極めて多い。まづ正法念處經の地獄品觀佛三昧海經長阿含經第十九大樓炭經起世經起世因本經増一阿含經第三十六卷優婆塞戒經十八泥梨經鐵城泥梨經四泥梨經等の經典智度論瑜伽論婆沙論等の論部にも、相違はあるがみな地獄に就て説き述べて居る。源信和尚の往生要集は十個の章段を分けて編述してあるが、其の中最初の厭離穢土の段にまづ地獄を出して、諸經論によつて其の有様が述べてある。世の人をして往生要集と云へば地獄の苦相を聯想せしめる程、その敘述は巧妙であり、社會人心の上に深い印象を残したのである。

さて此に一應定めて置かねばならぬことは、佛教の經典の中に地獄の思想が成立したのは恐らく後代のことであらうと云ふことである。このことは釋尊

の時代には未だ十分の地獄の責罰といふやうな思想が有り得ない。たとひ有つてもそれは極めて漠然たるものに過ぎなかつた。釋尊の時代にはその偉大なる人格の感化力が弟子の上に強く働いて居つた。かくて此の時は地獄と極樂とは更に問題にならなかつた。然るに滅後遺弟の渴仰は次第に當來の導師彌勒慈尊を兜率の内院に認め、兜率上生の思想や阿彌陀佛の極樂世界に往生する思想が油然而として盛になつて來た。それと共に一方にはマヌの法典などが成立して正義の觀念や善惡の業報に對する應償の思想が著しくなつて來て死後の責罰苦界輪廻の説明が甚だしく經典の上に加はつて來た。これは恐らく西紀前二百年頃より早いことは無からうと思はれる。其前後にマヌの法典が成立したのであるし、又西紀前三世紀の頃の佛教の狀態がアソカ王の刻文などで略ぼ想像せられるのであるが、其の時分の佛教には尙ほ未だ地獄などの思想がさまで見えて居ない。即ち其時代から印度南方のセーロンなどに傳へられて來たパーリ語の佛教經典の中には殆ど地獄のことが説いてない。只稀に

惡趣といふ程の意味のアーバーヤとかドゥッガティとか、非ニバータとかニラヤとか云ふ言葉が見えて居るぐらゐのことである。要するに釋尊の時代には無く、たとひ有つても極めて漠然たるものであつた所の地獄の思想が西紀前一二世紀頃から何時となく勢を逞しく滔々として、佛敎經典の中へ入り込んだものであらう。漢譯の經典は殆んど總てこの影響を受けて、漢譯の長阿含經の如き長々と地獄のことを説いて居るが、セーロンに傳へられた長阿含經即ちデーガニカーヤの中では更に地獄のことが説いて無い。而して漢譯經典の地獄は極めて變幻奇怪であつて、やがてこれが支那に於ては吳道子などいふ畫工によりて種々なる地獄變相の圖も造られるやうになり。支那朝鮮日本の民族精神の上にも多大の感化影響を及ぼしたのである。其のうちに何時しか十王經などいふ經典が作られた。これがまた死後の追善を奨励した事は非常なものである。果ては經典の中に見えない賽の河原などいふやうな一種の地獄が傳へられるやうになつたのである。

本論

第一編 異敎の地獄

第一章 基督教

基督教で地獄のことを説いた部分には佛敎に比すれば極めて少いと云はねばならぬ。然しながら全然無いかと云へばどうして中々無いどころでは無い。基督教の一部分で地獄などに關する來世觀を嫌ふやうになつて來たのはまだ漸く半世紀このかたのことである。それまでは随分種々な來世觀もあつたのである。聖書の上に地獄の記事こそは見當らないが、地獄とか消えざる火とか其他多少こんな種類の言葉は澤山に見えて居る。これらの原語はタルタロス若しくはゲヘンナなどであつて、前者は幽穴の義、後者は即ちヒノムの谷と云ふ義で現實の地名から來たものらしい。即ちヒノムの谷は廢物を焼き棄てる場所

あつた。それはとにかくこれらの言葉を使用した人々の精神の中には必ずや來世の幽闇な責罰を蒙る苦界の觀念が臚げながらに儼在したことは勿論である。そのことは終末の日とか神の審判とか云ふ思想がよく現はして居る。これらの問題はエスカトロジ即ち終末論でも云ふべき神學上の一科で取扱ふのであつて原始基督教には幾分かゝる思想は曖昧であるにしても年代を経るに随つて次第に濃厚となり中世時代には立派な地獄が成立して居る。

約翰黙示録の神の審判を述ぶるあたり、諸の民族か白き衣を着て櫻欄の葉を持つて神の前に立つて居る。白い雲がある。その雲の上に人の子の如きものが、頭には黄金の冠を戴き手には利鎌を持つて坐つて居る。地の穀物葡萄已に熟せりと云つて、悪人をその利鎌で刈り取り、大なる酒船に投げ入れ、町の外れでこの酒船を踏むと血はそれより漲り出で、馬の轡に達する程に至り、廣きこと七十五里であるなどいふ記事は確かに地獄と見做して差支ない。中世時代になるとかういふやうな材料から次第に込み入つた地獄が傳へられたに

違ひない。

その中世時代の地獄を最もよく代表してゐるものはイタリヤの詩人ダンテの(註)神曲である。この神曲の地獄は地殼から地心に亘る一大漏斗狀の坎である。上層から下層へ行くに従つて罪も重く罰も重くなつてゐる。而して最も上層は怯懦なる者の罰せらるゝところ、これは地獄の圏外である。これを下つて本地獄に入れば環狀の斷層は段階をなし底を加へて都合九個の環となる。第七環は三圓に、第八環は十(註)に、第九環また三圓に分れ、上層の五環は放縱罪が罰せられ、下層の四環は邪惡罪が罰せられる。すべて下層に至る程罪罰共に重くなつてゐる。

ダンテは齡三十五歳西紀一三〇四年四月八日基督磔殺の聖金曜日を以て師ブルヂリオに導かれて地獄に入り、約二十四時間にして地心に至り、また約二十一日間を費やして南半球面に出で、復活日の朝を以て碧空高く淨罪山を仰いだとなつて居る。

まづ圏外の一處 怯懦なる亡靈の一群に會ひ、その中にも最初に出逢つた罪人は註釋者の解する所によれば法王チエレスタイノ第五世であつた。あさましき人々は裸體でそこらの蛇や黄蜂に刺されてゐた。顔には血の條を引き涙に混る血を忌まはしい蟲が嘗てゐた。

第一環の内には洗禮を受けない異教徒たるの故を以て王者武人哲人詩人等も居た。かのソクラテースもプラトーンも原子論者のデモクリトスも犬儒學派の有名な桶の中に住んだデイオピテースもゐた。

又第七環第二圓には自殺をしたものが樹木と化して林をなして居る。葉は色黒すみ枝は曲りくねりて毒の刺あり蜜生するさまはもの凄くもすさまじい。アルピエなる鳥が廣き翼と人面とを具へて奇怪な樹の上に啼く。四邊には静寂の中に呻吟の聲を聞く。ダンテ師の言葉によつて小枝の端を折れば血は黒々と流れて何故に俺を折るかと思ひの聲が小枝の先から血と共に迸る。中にも哀れ深きはフランチェスカとバオロとの戀物語である。フランチェス

カはラゼンナの領主グアド・ボレンタの娘である。ボレンタ家とマラタスタ家の軋轢の和睦を計るために、みめよき彼の少女はマラタスタ家のジャンチオットなるものと結婚することになつた。然るにジャンチオットは武勇ではあつたが不具の醜き男であつたので其の弟のバオロを身代りとして遣はしフランチェスカを伴つて來させた。バオロは美男であつた。あはれやフランチェスカは欺かるゝとは露知らず美男のバオロを二世かけてのわが夫ぞと信じてゐたのに、やがて定められた夫はバオロにあらで、どりわけ醜い兄のジャンチオットであつた。若く美しいバオロを戀ふる思は目を追うて燃えた。遂にこれと通するやうになつた。これが夫ジャンチオットに知れて、二人共に慘らしい殺されやうをした。その邪淫の罪を犯した二人の亡靈がそこともわかず相擁し輕やかに風のやうにやつて來る。ダンテはこの哀れな亡靈に語りかけた。フランチェスカの口からありし昔の楽しい戀物語が話される。

悲境にあつて幸福の日を想ふよりいたましき悲しみはない。されどもわれ

らの戀の始めを知らんと求めたまふ卿に涙の種の物語を聞え上げませう。あの日のこと、私達は心やりにとてかのランナロットの戀のいくだりを讀みました。讀みゆくうちに幾たびか眼はそゝられ又顔蒼ざめて打ふるひやがて微笑をたゝへた王妃の唇をランナロットの接吻せしに讀み至つた時この人は妾を接吻した。この日より復とはこの書を読まなかつた。バオロの靈は傍らにさめくと泣いてゐる。而して永久にフランナエスカの傍から離れない。あはれ惡縁の羈にもあるかな。凄慘の鬼氣悚として人に迫る。ダンテはそゝろに人心地もなくなつて、ばつたりと死人のやうに地に倒れたとある。

次にまた慘ましくも哀れなるは、最終第九環の第二圓なるアンテナラに於ておのが子等と共に高塔の上に餓死せしめられたウゴリノ伯の慘話を聞く一段である。

ウゴリノはピサの貴族であつてゲルフィ黨に屬してゐたが、一二八四年メロリアの海戦にデノブ人に負たが、同年ピサの長官に選ばれて孫のニノ・非スコ

ティと争ひ、爲めにピサのゲルフィ黨は分散した。此にギベルリニ黨の首領大僧正ルッヂェリは先づウゴリノに與してニノを放逐し、次でウゴリノを糺弾して遂に一二八八年彼とその二兒二孫をピサのグラランディア家の塔の中に幽閉して餓死せしめたとは歴史の語るどころ、この裏切りの因果應報はまさしく此に示されてゐる。

只見る寒さ肌を劈く氷獄の中、一つの穴に凍る二人の者がある。一の頭は他の一の頭へ覆ひ蓋さり、上のものは下のものゝ頭蓋に無残や齒を立て、飢たるものゝ食り食ふやうに嚙じつてゐる。ダンテの訊問にかの一人は口を餌食から離して、滴る血潮を後方に亂れた髪の毛に擦りつけつゝ泣きながら語る。俺こそは伯爵ウゴリノでこれは大僧正ルッヂェリである。思ひ出しても腹立しや、此奴の欲望が成就して彼を信じ切つてゐた俺が捕へられた。後代にまで飢餓の塔と稱せられたあの時の中に、七月から年を越えた三月まで、悲しいわびしい多くの月を送つた俺は、ある恐ろしい悪夢に襲はれて目覺めた。曉、食物の興

へられる時が近づいて、而も俺は怖ろしい塔の下の扉が鍵かけらるゝ音を聞いた。もはや塔は復び開かれなかつた。恐ろしい沈黙は續いた。泣きもせず涙も出なかつた。心は石のやうになつた。可愛い孫のアンセルモは「父さま何」と云ふて泣く。幾日は経つた。四人の顔には絶望と恐怖が恰ど自分のそれと同じやうに顯はれて來た。俺は覺えず自分の雙手を嚙んだ。すると食はうとしてかく爲したと思つたか、起き上つた子等は「父さま私達を食べて下さい。その方が苦しいのよりましですから」と叫んだ。その日も次の日も皆黙つてゐた。あゝ無情の地よ、何故に開かざる。かくて第四日にガットは「父さま助けて下さいよう」と云ひつゝ、わが足もとへ身を投げて死んだ。そのうちに一人また一人と、三人の餓死を親たり見た俺は、盲目のやうに索りながら二日の間彼等と呼んでゐたが、やがて飢餓は悲みのなし能はざりし所をなさしめた。俺は自己の兒孫の肉を食つた。かく語つた時ウゴリノは口を歪め、犬のやうに無惨な頭蓋をまたもや捉へた。

かく歴史上の人物を拉し來つて地獄の叙述をやつたのが神曲の地獄篇である。

(註一) ダンテ神曲は中山昌樹氏譯による。

第二章 回々教

回々教即ちマホメット教ではやはり猶太教などで云ひ傳へた地獄を多少取り入れたのであらうと思はれるが、その經典たるコーランの上には二箇所ほど地獄のことが載つて居る。これで見ると、地獄は七重から出來て居て、沸き返る噴泉を飲まされ、食ふに食物なく、座するに席なく、苦しみを受ける。又火焰が炎々と燃え、松脂がジワ／＼と煮えて居る中に、或は枯れ乾いた荆棘の中に居らねばならぬ。耶蘇教徒猶太教徒星を拜するもの、魔術を行ふもの、偶像を拜するもの、偽善者その他罪を犯した回々教徒がこの中へ投げ込まれるといふことになつて居る。

回々敎の地獄はコーランの上では常に「火焰」と稱せられて居る。而して七門七處ありといふ風になつてゐる。七處の名前は次の如くである。

(一) ゲヘンナ、これは罪障の消滅して居らぬ回々敎徒がこの中で罪障の淨めをやる即ち淨罪界である。

(二) ラツア燃ゆる炎。

(三) フタマ、荒ぶ火焰、あらゆるものを寸々に破毀する。

(四) サイル、沸き返る炎。

(五) サガル、焦す炎。

(六) ジャヒン、猛り狂ふ炎。

(七) ハキエ、深淵のどん底。

コーランの經典の上に別に文證は無いけれども、この中で第二獄はキリスト敎徒が落ちる地獄とし、第三獄は猶太人が落ちる地獄だ等と回々敎徒は註釋を添へて居る、コーランの中から地獄の苦痛に關するものを拾ひ上げるならば次

のやうな記事がある。腸は寸々に断たれ、皮膚も破れるであらう。鐵の棒で打たれるであらう。幾度となく苦しさに堪へ兼ねて逃げ出さうとするが其の度毎に同じ處へ引き戻される。而してその苦痛が罪人に對つて、「燃ゆる苦みを味へ」と叫ぶ。又罪人は身を焦す熱風の中に、焼け爛らせる湯玉の中に、黒い烟の蔭に、熱して苦しみつゝ居るのである。蓋し前生に於て浮世の歡樂を肆にし、醜惡な罪をなすことに耽りつゝ、而も自ら謂ふやう、死しては塵土となり、只白骨を残すのみである。果して再び生るゝことが有らうか。祖先たちは果して再び生れて來たのであらうか。疑はしいものだと言つた。これはみな最後の審判に附せられるのである。復活を疑ひ、これを偽りと云へるものよ確かにアル、ツアツクムの菓實を食ひそれを以て腹を一杯にするであらう。沸き返る湯玉を飲むこと、恰も渴せる駱駝の水を飲む如くであらう。これらが審判の日の御馳走である。汝の否定せし地獄の苦みに行け。地獄の烟は三條の柱となりて中天に騰つて居る。さはれ汝を焰から覆ひかくしては呉れない。高塔の

やうな大きい火花その色は黄なる駱駝のやうなのを汝に向つて投げるのだ。こんな風で一語は一語より急に、一句は一句より切に、不信者に對して誡めの言葉を列ねて居る。

第參章 婆羅門教

次に婆羅門教の地獄に移らう。婆羅門教は世界を上部七界下部七界及び地獄界の三部に分けて居る。上部七界は我々の住んで居る地界から始まつて因陀羅の住處である天界梵天の住處である眞界などが含まれてゐる。下部七界は總じてバータラとも稱する。時としてバータラが即ち地獄のこと、見做されることもあるが、これは惡魔の種族蛇神藥叉神などの住處である。バータラの下には世界を支えて居る千頭を有つた蛇が居て世界破滅の時に毒火を吐くと云はれて居るが、この下が正しく地獄界になつて居る。婆羅門教の地獄は種々になつて居る、マルカンデーヤ、ブラーナには七地獄、バドマ、ブラーナにも

七地獄マヌの法典とアグニ、ブラーナには二十一地獄、ギシユム、ブラーナとブラーガ、ワタ、ブラーナには二十八地獄を擧げて居る。此に注意すべきは奇體にも地獄の數へ方が七十二、二十八といふ風に單位を七に取つて居ることである。佛教の地獄は八寒地獄、八熱地獄、十六の別處、三十二別處、一百三十六地獄といふ風にみな單位が八に取つてある。

今マルカンデーヤ、ブラーナに出てゐる七地獄は次の如くである。

- (一) 叫喚地獄、これは虚言者の墮ちる地獄であつて熱したる土は炭火を以て盛に燃えてゐる。罪人は熱火に苦しめられて此の熱地の上を走る。
- (二) 大叫喚地獄、この地獄の地面は悉く熔けた銅である。光景極めて怖ろしく、罪人はその熔銅の中に展轉し、其の中で鴉、狼、梟、蝸等に噛まれ、空中からは大鷲が下つて来て引き裂かれ、苦しみの絶え間が無いから大聲を擧げて「あゝ母上よ、あゝ父上よ、あゝ兄弟よ」と叫ぶと云ふ。
- (三) 黒闇地獄、この地獄は極めて寒い地獄であつて、四面は總て闇黒を以て覆は

れて居る。罪人は闇黒に苦しむ、無闇矢鱈にあらちらを彷徨ひ歩く。罪人同志が互に出會ふ時は相抱き合ひ終には掴み合ふ。齒は寒さの戦慄のためにガチ／＼と噛合はせるので碎けて仕舞ひ、飢と渴とに通る。烈風忽ち雪を伴ひて來り、身を裂き骨を碎く、罪人は飢渴のあまり自分の髓を啜つて一時を凌ぐ。

(四) 截斷地獄、この地獄は閻魔王の臣下の指圖の下に、黒い繩でもつて罪人の身體を縦横に縛り付け、その繩の通りに身體を截斷するのである。頭から足まで先づ眞二つにせられる。然しながら尙ほ命は終らない。それから身體は百分にも切り刻まれ、又もや結合せられるのである。

(五) 動轉地獄、この地獄には車輪と釣瓶と繩とがあつて罪人を苦しめる。罪人の中には車輪と一所に絶へ間なく回轉して幾萬年を経過するものもある。或は釣瓶の繩に付き纏ふものもある。眼よりは涙を流し、口よりは血を流して苦しむのである。

(六) 劍葉林地獄、この地獄の眞中に一つの美しい森がある。葉蔭鬱々と茂り

合つて居る。然し葉は悉く劍の刃である。一萬二千の猛犬は口を張り牙を鳴らして虎よりも恐ろしい。罪人はこの時この美しい森を見て心嬉しさを覺え、即ち其の森に向つて進んで行く。「あゝ母上よ、あゝわが心よ」と聲を限りに叫びつゝ、兩足は地の火焰に焼かれて漸く森に行き着けば、風吹き來つて劍葉は驟雨のやうに身に散りかゝる、風に煽られた猛煙の逆巻く中に倒れ伏せば、猛犬は襲ひ來りて喰ひ裂くのである。

(七) 灼熱瓶地獄、この地獄は猛煙の中に据付けた大きな瓶がある。中には鐵と油とが沸々と煮え返つて居る。獄卒はこの瓶の中へ罪人を取つて眞逆さまに投げ込めば碎けた手足からは髓が流れて、痛むこと譬ふるに物もない、頭蓋眼球骨みな恐ろしき猛鷲のために碎かれ、鷲は空中高く啄み上り、又もや瓶の中へ落下せしむ。油の作用で又もやもとの身體となり、或は手足處を異にして油の中に渦巻をなしつゝ、攪廻さる。

苦しみの有様は大略恚ういふ風である。又他の場所に(一)灼熱瓶(二)粉碎(三)熱

沙(四)苦具池(五)劔葉林(六)鋸割(七)黑繩の七地獄を數へて居る。然しこの七地獄は同一人が次第に順を追うて經過する地獄である。

バドマ、ブラーナに出てゐる地獄も大同小異で、中には膿血地獄、釜湯出地獄といふのがある。其他マスの法典などに出て居る地獄の中に等活、大阿鼻至、焦熱、衆合、黑繩、大焦熱などの名稱が出てゐる佛教の名稱と同一であるのに注意せねばならぬ。佛教が名稱を踏襲したのもあらうし、又佛教の名稱を其儘婆羅門教が用ひたのもあらう。相互に影響したものと思はれる。

以上婆羅門教の地獄に關して、ざ・と一瞥を與へた。即ちマルカンデーヤ、ブラーナに七地獄、バドマ、ブラーナにも七地獄、アグニ、ブラーナには二十一地獄、マスの法典にも二十一地獄、ボシユス、ブラーナには二十八地獄、ブハーガワタ、ブラーナにも二十八地獄が列ねてゐる。而して前にも述べた通り、これらの地獄の名稱の中には、佛教の地獄の名稱に似たもの、或は全く同一のものが少くないといふことを注意せねばならぬ。

さて已上自分は佛教興起以前の思想の中で、地獄といふものを辿つて、發達の迹を釋ねやうと試みた、然しその材料として使つたものの中には、ブラーナの如き比較的後代のものがある。此の如きものを以て佛教興起以前のものであるとするならば誤りであらう。自分もよく承知して居るのである。然し凡そ佛教興起以前に於て天界地獄の如き問題に關して説いてあるものと云つては殆ど此の他に於て文献の徴すべきものが無からうと思ふ。而してこれらのものは決して一朝にして成立したものであるまい。必ずや幾代の傳説を集め來つた、云はゞ民族精神の結晶と見做して差支はなからう。されば佛教興起以前にも已にこれらの説を引き起すに足るべき十分なる萌芽が有つたといふことは否定出來ないと思はれる。佛教はこれを巧に自己藥籠中のものとして、咀嚼し消化し、換骨奪胎したに過ぎない。

而して佛教がこれら地獄の思想を構成するやうになつたのも恐らく後代のことである。若し夫れ釋尊の時代にあつては、釋尊の偉且つ大なる人格の力が

儼然として弟子の前に立つて居た。此の時地獄と極樂とは更に問題にならなかつたのである。而もこれ偉大なる人格を俟つて始めて此の如くであることが出来る。滅後日久しくして教主の人格の影次第に薄れゆくや、遺弟の渴仰は日一日烈しさを加へた。抑えんとして抑え能はざる民族宗教心の高潮は幾代の人心の上に牢固として抜くべからざる宗教的情操を植え付けた。即ち地獄の思想が滔々として盛なるに至つた徑路である。

第二編 佛教經典の上に現はれたる地獄

第一章 正法念處經 (其の二)

正法念處經は七十卷ある。其中第五卷の終りの方から第十五卷まで悉く地獄の叙述で埋められてゐる。即ち地獄の叙述では最も詳細を極めた經典である。

さて地獄は、(一)活(二)黒繩(三)合(四)叫喚(五)大叫喚(六)焦熱(七)大焦熱(八)阿鼻の八處から成つて居る。而して活地獄は殺生のもの、生れる地獄である。人間の五十年を四天王の一日一夜として彼の四天王の五十年を活地獄の一日一夜として五百年の壽命である。別處が十六ある。(一)尿泥(二)刀輪(三)瓮熱(四)多苦(五)閻冥(六)不喜(七)極苦(八)衆病(九)兩鐵(二)惡杖(二)黒色鼠狼(三)異々廻轉(三)苦逼(四)鉢特摩鬚(五)陂池(六)空中受苦これである。

(一)尿泥處は熱い糞泥が赤く熱した銅汁と交せてある。金剛の嘴ある蟲が

佛教經典の上に現はれたる地獄

一面に匂ひ回つて居る。罪人はこの糞泥を取つて喰ふ。其の味極めて苦い。蟲は腹の中に這入つて臟腑を悉く喰ひ盡す。惡業が盡き果てた後たま〜人間に生れても短命に死なねばならぬ。

(二) 刀輪處。刀の葉の林がある。水もたまらぬばかりの利刀が倒にかゝつて居る。遠くから眺めると青々として美しい林のやうに見える。罪人は炎々と燃え上る炎の中に雨のやうに降り來る熱鐵を浴びて苦しさに堪へず。逃げて出して行くに向うの方にこの青々とした林が見える。喜んで辿り付けば利刀はバラ〜と身に降りかゝつて、身體は寸々に斬られてしまふ。それでも業報で死ぬと云ふことは無い。

(三) 瓮熱處。鐵の釜の中で豆を煮るやうに煮られるのである。熱きこと譬ふるに物もない。

(四) 多苦處。様々な仕方て人を苦しめたものが恰うご其の仕方てのやうに苦しめられる。惡業が盡きても尙ほ餘殘業を受ける。人間に生れて王のために罰

せられたり親族朋友などに憎まれたり、無辜の冤罪を被つたりするのはこの餘殘業であると云ふ。

(五) 閻冥處。これは外道などに仕へて、羊の口と鼻を押へて殺して邪神を祭つたり龜を瓦で押し殺して供へ物にしたりするものが墮ちる處である。闇黒で一寸先きも見えない。罪人同志はお互に見すに蠢いて居る。それに恐ろしい熱氣が身體を焼き焦す。又金剛山を吹き散らす荒い風が熱風となつて刀のやうに身を斬り裂くと云ふ。

(六) 不喜處。法螺貝や太鼓で鹿や猪を狩り出して殺したものが墮ちる處。鷲や狐や狗などのやうな嫌な聲を出す鳥や獸があらん限りの厭な聲を出して罪人を苦しめる。又金剛の嘴ある虫が身體を食ひ破つて骨に食ひ入る。惡業盡きて人間に生れても餘殘の業のために常に愁ひの聲不吉の聲を聞き妻を亡ひ財物を失ふ。

(七) 極苦處。こゝでは熱鐵の火に焼かれ崖の下へ突き落され、様々に絶えず

苦惱を受ける。正法念處經はこれだけで活地獄の叙述を止めて居る。十六別處の中残る九つは名前だけがあつて説いては無い。

黒繩地獄には(一)等喚受苦處(二)旃荼處(三)畏鷲處の三處が擧げてある。これにも十六の別處があるとは見えて居るが三處だけしか擧げて無い。これは名前すらも擧げてない。

(一)等喚受苦處。こゝでは熱い炎が燃えて居る。黒い繩で罪人を縛つて利刀を以て斬りこなし熱鐵の大地の上へ抛げ落すと鐵焰を吐き牙を鳴らして狗が貪り食らふ。一切の身分は分々に分離し肉の片々がみな聲を擧げて啼き叫ぶ。人間に生れても邊鄙の境に生れ人に嫌はれ憎まれるのはこの地獄の餘業である。

(二)旃荼處。鳥や鷲のやうな惡鳥が眼の玉を抜き、獄卒はまた舌を抜き、熱銅汁を飲ませられる。

(三)畏鷲處。鐵地に火焰が起つて居る。罪人は獄卒に逐はれて常にその上を

走つて居る。その上飢渴に逼つて苦しむこと甚しい。人間に生れて改畜をやするものはこの地獄の餘殘の業である。

合地獄には種々の苦相が擧げてある。或は熱鐵の嘴ある鷲が鴈を取つて樹の上に掛けて食ふあり。或は赤熱の銅汁が流れてゐる河の中へ投げ込まれて流れ木のやうに漂はされて行くものあり。日の出の時のやうな紅の色をしてゐるもの、重い石のやうに沈むもの、岸に打ち付けられるもの、身體粉微塵に碎かるゝもの等様々である。或は釜の中で豆などを煮るやうに煮られると上になり下になつて互に泣き號ぶあり。或は刀葉林と云ふ處で苦しむものがある。刀劍の葉が茂り合つた林、その邊は火が盛んに燃えて居る。樹の上に美しい少女が居て罪人を招く見ればよく知つてゐる少女である。愛戀の情に堪へ兼ねて、遮二無二樹の上へと昇つて行く。すると鋭き刀葉は容赦もなく身を切り骨を劈く。漸くにして樹上に昇つたと思へば少女は早くも地上に居る嬌態を作つて何故早く來たまはざるやと恨めば、又もや刀葉を分けて樹を下る利

刀は逆しまに轉じて肉を破り、血みごろになつて漸く下れば、少女は又もや樹上に居る。この種類の苦を受けるのである。この地獄にも十六の別處がある。

(一) 大量受苦惱處。この場處はなすべからざる姪欲を行つたものが行く。或は炎熱の鋒を以て縦横上下に身體を刺し貫ぬかれ、或は燒かれ、或は煮られ、或は熱鐵の鉗を以て睪丸を引き抜かれ、或は鐵の鷲が睪丸を引き抜いて食らふ。後に人間に生れても宦官となるやうなのは、この餘殘の業報である。

(二) 割刳處。これは婦女の口中に於て姪を行すが如きことをなしたものが行く場處である。熱鐵の釘を以て其の口中に刺し貫ぬき、或は頭より、或は耳より抜く、又鐵鉢に銅汁を盛つて、口中へ注ぎ込む。銅汁は噴煙を迸らせて、臟腑を燒き盡し、糞門から流れ出る。後にたゞひ人間に生れても餘殘の業報のために口中常に臭氣を放つ。

(三) 脈々斷處。これは婦女の身に於て行ふべからざる所に姪を行ひ、隨はぬを無理やり力で押へ付けて、決行したものが行く處である。熱筒に熱銅汁を盛つ

て口中に一杯ならしめる。後に人間に生れても餘殘の果報のために、自分の妻は他人を愛し、自分はこれを遮り止めることが出来ない。

(四) 惡見處。これは他人の娘を捕へて力にまかせて強姦をなしたものが行く處である。自分の娘が捕へられて鐵の鋒を以て陰部を刺し貫ぬかれて苦しんで居るのが見える。可愛さうにと思ふ心の苦痛が身を切らるゝよりつらい。又自分も糞門から逆に銅汁を注ぎ込まれて大に苦しめられる。後に人間に生れても不男即ち生殖不能の人となるのは、この餘殘の業報である。

(五) 團處。牛馬などの獸に對して姪を行つたものが行く處。罪人牛馬を見て慾心熾に起り、根門の中に入る。腹中には火炎甚しく燃えて身を燒き爛らせる。黑暗の中に聲も立て得ず苦しむのである。後に人間に生れても野蠻の國に生れて、己が妻を他に取られても何とも思はずに居るやうな場合がこの餘殘の業報である。

(六) 多苦惱處。男子に對して姪を行つたものゝ行く處。その男子が自分に抱

き付き来る。身體悉く熱焰で燃え立つて居て、堅きこと金剛の如くである。抱かるれば身體は粉微塵になる。逃げ廻つて険しい岸の下へ落ち込むと鳥や獸が我れ勝ちに食ひ裂く。又釜の中で煮られる。後に人間に生れても妻に縁が薄くて幾人代えても妻が居つかない。たま／＼居付いても他人と通するやうなのは、この餘殘の業報である。

(七) 忍苦處。戰爭の時に婦女を奪つて強姦したもの、行く處。罪人は足を上に顔を下にして樹の枝へ懸けられる。下には大火炎が燃え起つて罪人を焼く。罪人苦痛に堪へずして聲を擧げて泣き叫べば、火は口中から入つて臟腑を焼き盡す。又鳥が來て罪人の身を啄み食らふ。後に人間に生れてたま／＼美人を妻としても戰爭のために奪ひ去られるやうなのは、この餘殘の業報である。

(八) 朱誅朱誅處。羊や驢馬に姪を行じたもの、行く處。鐵の蟻が一面に付いて常に離れず身體を刺し身體の中には火が燃えて居る。内外の苦痛譬ん方も無い、又朱誅朱誅と云ふ蟲が肉を食らひ、血を飲み、骨を破り、髓を食らふ。後に人

間に生れても敵が多くて貧乏をするのは、この餘殘の業報である。

(九) 何々奚處。姉妹などに姪を行じたもの、趣く處。此處で罪人は常に焼かれ常に煮られる。また甚しく打たれる。泣き叫ぶ聲は五百山旬の外に聞える。聞くだけでも身が縮み上る程の大惡聲であるが、罪人は中有に於てこの聲を聞けば面白い歌の拍子のやうに聞える。到りつくると大惡聲と變る。又鳥丘山と云ふ山がある。炎々として火が五千由旬の高さに燃え上り、處空に聳えた鐵の樹には鐵の鳥が隙間もなく居る。然しこれが罪人には蓮華の咲き亂れた處のやうに見える。打たれたり焼かれたりした恐ろしさに逃げ廻つて、この美しい場所を見て喜んでやつて行くと、豈圖らんや、炎々たる焰の中から無數の鐵の鳥が飛び出して散々に苦める。後に人間に生れても癩病に罹つて身體爛れて臭きは、この餘殘の業報である。

(三) 淚火出處。破戒の比丘尼を重犯したもの、行く處。大火に焼かれて眼より火の涙を出す。又鐵棒で打ち碎かれる。又熱鐵の鉗を以て糞門を劈き、白

熱の蠟汁を注ぎ込む。かくて後に人間に生れても腹中に病が有つて身體瘦細つて居るのはこの餘殘の業報である。

(二) 一切根滅處。多欲のために婦女の口中糞門に於て姪を行じたもの、行く處。或は火を口に満たし、或は赤銅汁を入れ、或は熱焰の鐵蟻に眼を食はれ、或は白熱の蠟汁を耳に入れ、或は利刀で鼻を截られ、一切の諸根は甚しい苦痛を受ける。後に人間に生れても妻不貞にして姦夫と謀つて自分を殺すやうなことになるのはこの餘殘の業報である。

(三) 無彼岸受苦惱處。他人の妻を姪したもの、行く處。苦痛には火燒刀割、熱灰諸病あり、後に人間に生れても常に多病のために苦しめられる。

(三) 鉢特摩處。在俗の時姪欲を行じたものが出家の後夢に姪事を行ひ覺めて後人に姪欲を勧めたもの、行く處。鉢特摩は紅蓮華である。此處はすべてのものが紅色である。罪人或は釜で煮られ、或は鐵の臼で搗かれる。この苦かし逃れて向ふの方に清涼な紅蓮華の池を望み見て大に喜んで走り行けば紅蓮華

は火焰となつて罪人を花瓣の中に包み込む。後人間に生れても眼が悪く貧乏で短命である。

(四) 摩訶鉢特摩處。破戒の沙門の行く處。摩訶鉢特摩は大紅蓮華と譯す。灰波河と云ふ河に漂はされ種々の苦惱を受けた後大紅蓮華を見て走り行けば、蓮華は罪人を堅く包んで中には一面に火焰が燃え、鳥が眼を食ひ舌を抜き耳を裂く。後に人間に生れても常に病身で飢渴にせまりまた怒り易いのは餘殘の業報である。

(五) 火瓮處。これは出家の沙門が在家の時のことを執着した報ひで行く處。熱焰徧ねく満ちて處として焰ならぬ處なく、罪人泣き叫ぶにつれて眼耳鼻舌身悉く焼け爛れる。後に人間に生れても身體短小に、或は盲、或は聾となり、短命にして飢渴に苦しめらるゝは餘殘の業報である。

(六) 鐵火末處。出家した沙門でありながら婦女歌舞の聲に染着して不淨を漏す等のもの、行く處。四面は鐵壁で高さ五百由旬炎々たる鐵火は常に燃えて

絶えず罪人を焼く、罪人の身體は分散して粉微塵となり、その粉末が雨の如く下つてまた罪人を焼く。後に人間に生れても常に臆病で恐怖に苦しむのはこの餘殘の果報である。

以上は合地獄の苦相である。この地獄は大體に於て殺生偷盜邪淫のものが行く地獄となつて居る。

第二章 正法念處經 (其の二)

叫喚大叫喚の二地獄は殺生偷盜邪淫妄語飲酒の罪に相當し罪人が苦しむ聲から付けた名稱である。叫喚地獄には十六の別處がある、其の中第四を火末蟲と云ふ。これは酒に水を加へて賣つたものが行くところで、四百四病を生ずる。其の一病の力はよく四大洲若干の人をして一日一夜の中に死滅させてしまふ。又身から蟲を生じて、皮肉骨髓を破り食ふ。又第七の別處を殺々處といふ。酒を以て他の貞良な婦女の心を亂して姪を行じたもの、行くところである。熱

鐵の鉤を以て男根を抜くに、抜けば生じ生ずればまた抜く。この苦に堪へかねて走つて他の處へ行けば前面に險しい岸がある。恐ろしい禽獸が争つて引裂き食ふ。又第十五の別處を火雲霧といふ。獄火は炎々として燃え上つて居る。獄卒は罪人を捉へて火の中を歩ませると、足から頭まで一切焼け亡せてしまふ。火の中から出して來るとまたもとの通りになる。かくて無量劫千歲苦を受けるのである。

大叫喚地獄には十八の別處がある。其の中第十五の受鋒苦處では細長い熱鐵の針を以て罪人の口舌を貫いて叫喚啼哭することすらも出來ない。第十六の受無邊苦處では鐵熱の鉗を以て舌を抜き出す。抜けばまた生じ生ずればまた抜く。又剃刀のやうな利刀でもつて其の身を削る。

焦熱大焦熱の二地獄は前の地獄へ落つる罪の上に外道などに従つて邪見の罪を重ねたもの、行く處である。これは猛火の焼き焦す勢ひから付けた名稱である。若しこの地獄の豆ばかりの火を以てこの世界に置けば、世界は一時に

焚き盡されてしまふ。まして罪人の身は極めて柔かい。この地獄の火から見れば、前の地獄の火は雪のやうである。

この焦熱地獄にまた十六の別處がある。其中第二の分荼梨迦(白蓮華)といふところでは、罪人の身は一面に火焰が燃えて居る。芥子ばかりのところも火焰ならぬところは無い。罪人がこの地獄へ墮ち込む時には、「早く来い、早く来い、白蓮華の池がある、飲むに水あり、涼しい木蔭あり、早く来い、早く来い」といふ聲が聞えるので、急いで走り込めば、火焰ばかりの處である。又第十五の閻火風處では、罪人は惡風に吹かれて虚空の中に車輪の如く廻轉して居る。身體が認められない程、迅く廻轉する。また刀風吹いて身を砕くこと、砂の如く、十方に分散せしめる。分散すればまた生じ、生じてはまた分散する。

大焦熱地獄は前の業因に加へて淨戒を持つて居る尼を犯したものの、行くところである。恐ろしい獄卒に捉へられて六十八百千由旬の地方を過ぎ、また三十六億由旬を行き、漸々に下に向つて行くこと十億由旬、業風に吹かれて極めて

迅速に行く、この時遠く罪人の泣き叫ぶ聲が聞えるので、恐ろしさは愈加はる。かくて無量百千萬億年の間、泣き叫ぶ聲を聞いて、其の間獄卒の呵責を受け、地獄へ至り着けば、炎々と燃え上る火焰は高さ五百由旬、廣さ二百由旬、大山の岸から谷底へ落ちるが如く、この炎の中へ落ち込むのである。

この地獄にもまた十六の別處がある。第一の一切方焦熱處では、一切無間に虚空に至るまで熱炎ならざる所は無い。罪人は火中に聲を放つて泣き叫んでゐる。無量億歳焼け焦されるのである。又第七の普受一切資生苦惱處では、火焰の刃を以て身の皮を剥ぎ取る。肉を少しも傷つけずに、只皮だけ剥ぎ取るのである。そして身體を相連ならしめて、熱地の上に敷き、火を以て炙り焼き、又熱鐵の沸きかへる汁を身體に灌ぎかける。かくて無量億千歳この苦痛を受けるのである。

阿鼻地獄は五逆罪を作つたもの、行く處であつて、八大地獄の中で最も甚しい苦惱を受ける地獄である。前の七大地獄とその別處とに比ぶれば、其の苦

橋は千倍にも當る。罪人は獄卒に引き立てられて、阿鼻地獄を去ること二萬五千由旬にして已に地獄に居る罪人の泣き叫ぶ聲が聞える。頭面を下に足を上にして二千年の間落ちて行くのである。此處にもまた十六の別處がある。其中、第五を鐵野干食處と云ふ罪人の身上に火燃ゆること十由旬の高さに至り又鐵磚を降らすこと夕立の如く身體は粉微塵に碎け散る。又炎の牙ある鐵の野干が身體を食ふ。第六は黒肚處と云ふ。飢渴に逼られて自分の肉を食ふ。食へばまた生じ、生じてはまた食ふ。この慘憺たる有様はダンテの神曲に於けるウゴリノ伯を想ひ出さしめる。或は黒き肚の蛇が罪人に巻き付き、足の甲から次第に噛み食ふ。或は猛火の中に焼かれ、或は鐵の鏝で煮られる。又第十の兩山聚處では一由旬もある鐵山が上から落ちて來て罪人を砂のやうに碎く。碎けてはまた生じ、生ずればまた碎く。或は十一種の火焰があつて身を焼き焦す。或は獄卒が刀を以て身體の至るところを割り刻み、極熱の白鐵汁を割目に注ぎ込む。或は利刀で削られ、ば四百四病が一時に起る。又第十一の閻婆叵

度處では象のやうな太きさの閻婆と云ふ鳥が居る。鋭い嘴は炎を吐き出してゐる。罪人を掴んで空中遙に上り、東西に飛び廻つた後地上へ落せば碎けて百分となる。碎くればまた合し、合すればまた掴み上る。常にこれを繰り返して居る。或は利刃が路に出て居つて足を割く。或は炎の牙ある狗が來て身を噛む。かくて絶えず苦惱を受けるのである。正法念處經では、第十三卷の中程から第十五卷の終りまで、この阿鼻地獄のことに費して居る。而して最後に、かやうな苦惱はまだ一百分の中一つも説けては無い。説き盡すことが出来ぬ。譬へるものが無いからである。若し人これを知らば、恐らく血を吐いて死ぬであらうと見えて居る。以上正法念處經に現はれた地獄の叙述に一瞥を與へたのである。この中、叫喚地獄から以上は、もはや譬喩の語が盡きて同意義の語を反覆して居るかの觀がある。即ち叫喚地獄の終り位からは、前の地獄よりは何倍何十倍恐ろしい處であるといふやうに、屢前の地獄が引き合ひに出されて居るのでもわかる。

苦具には火焰と熱鐵とが常に繰り返されて居る。又鐵鑊と云ひ鐵鉤と云ひ鐵鋸といひ鐵鉗と云ひ鐵砧と云ひ鐵錐と云ひ鐵鑽と云ひ鐵箭と云ひ鐵繩と云ふこれらはみな熱鐵である。又熱湯が沸き返つてゐる。白鐵汁とか赤熱銅汁とか洋赤銅汁とか熱血洋水とかの語が屢々見える。動物では鐵鳥とか金剛の嘴ある鳥とか鷲とか鴟とか鷹とか見えて居る。又狐とか野干とか獅子とか象とか見えて又金剛の利牙ある黒蟲とか毒蛇とか常に繰り返される。これらの動物はみな炎を有つて居るのが常である。又利刀と熱風が屢々見える。熱した灰はまた重要な苦具となつて居る。さてこれらの苦具で罪人は肉體の上に忍ぶべからざる苦痛を受けるのであるがこれと同時にまた精神の上に耐へ難い苦痛を與へることを忘れては無い。即ち自分の子供が苦しめられる有様とか罪人の泣き聲を遠くの方で聞いて悶絶するとかいふ場合がそれである。又期待の失望を以て苦痛を與ふる場合も極めて多い。即ち蓮華の咲き亂れた池を見て走つて行けば案に相違して火焰が燃え上つて居るといふ類又美人を

見て山を上げれば美人は下の方に居るといふ類である。又對照法を用ひて苦痛を強く現はさんとしてある場所がある。即ち火燒の苦を云ふ前に清涼な處を叙述したり。罪人の泣き叫ぶ聲を云ふに當りてこれが歌舞音曲のやうになつて聞えることをいふが如き類である。

要するに種々の方面よりあらゆる手段を以て地獄の悽慘を描き出さんと勉めた正法念處經の叙述は恐らく何人も企て及び難い巧妙を誇つて居る。殊に罪人に對して獄卒が常に教ふる人の態度で説法して居るのは面白い。獄卒は決して罪人の外には無いのであるから罪人の自業が罪人を苦しめ同時に教誨を施して居るのである。これが即ち良心の呵責といふものと同列に考へられるでは無いか。

今叫喚地獄より以來の地獄の別處を表にして次に擧げそれで此の項を結ぶこととする。

叫喚地獄

- 一 大吼處
- 二 普聲處
- 三 髮火流處
- 四 火末蟲處
- 五 熱鐵火斧處
- 六 兩烟火石處
- 七 殺々處
- 八 鐵林曠野處
- 九 普鬧處
- 十 閻羅遮曠野處
- 十一 劍林處
- 十二 大劍林處
- 十三 芭蕉烟林處
- 十四 煙火林處
- 十五 火雲霧處
- 十六 分別苦處

大叫喚地獄

- 一 吼々處
- 二 受苦無有數量處
- 三 受堅苦惱不可忍處
- 四 隨意壓處
- 五 一切鬧處
- 六 人鬧燒處
- 七 如飛蟲墮處
- 八 死活等處
- 九 異々轉處
- 十 唐掃望處
- 十一 雙逼惱處
- 十二 迭相壓處
- 十三 金剛嘴鳥處
- 十四 火窟處
- 十五 受鋒苦處
- 十六 受無邊苦處
- 十七 血髓食處
- 十八 十一烟處

焦熱地獄

- 一 大燒處
- 二 分茶梨迦處
- 三 龍旋處
- 四 赤銅泥魚旋處
- 五 鐵鑊處
- 六 血河漂處
- 七 髓骨髓蟲處
- 八 一切人熟處
- 九 無終沒入處
- 十 大鉢特摩處
- 十一 惡險岸處
- 十二 金剛骨處
- 十三 黑鐵繩刀解受苦處
- 十四 那迦蟲柱惡火受處
- 十五 開火風處
- 十六 金剛峰曉處

大焦熱地獄

- 一 一切方焦熱處
- 二 大身惡吼可畏之處
- 三 火鬚處四雨沙火處
- 四 雨沙火處
- 五 內熱沸處
- 六 吒々々噴處
- 七 善受一切資生苦處
- 八 鞞多羅尼處
- 九 無間鬧處
- 十 苦鬚處
- 十一 雨練電抖撒之處
- 十二 變鳥處
- 十三 悲苦吼處
- 十四 大悲處
- 十五 無非鬧處
- 十六 木轉處

阿鼻地獄

- 一 鳥口處
- 二 一切向地處
- 三 無彼岸常受苦惱處
- 四 野干吼處
- 五 鐵野干食處
- 六 黑肚處
- 七 身洋處
- 八 夢見畏處
- 九 身洋受苦處
- 十 兩山聚處
- 十一 閻婆度處
- 十二 星憂處
- 十三 苦惱念處
- 十四 臭氣覆處
- 十五 鐵鑊處
- 十六 十一烟處

167
118
138

第三章 觀佛三昧經

觀佛三昧海經は十卷ある中第五卷に地獄の有様が説いてある。正法念處經の委しきには及ばないが然し第五卷の悉皆が地獄の有様の叙述に費してある。抑も觀佛三昧海經は釋尊が父の淨飯王に對して佛の相好は如何いふ風であるかといふことを觀察するやうに勸められた經典である。そこで觀相品といふのがある。佛の白毫相は如何いふものか佛の眼耳鼻舌身馬陰藏相に至るまでのことが委しく説き述べてあるが其中五卷目のところは觀心品と云ふて佛の心臟を觀する一段である。佛の心臟は紅の蓮華のやうである。其の蓮華の花瓣の間に八萬四千の白色の光明が輝き渡り其の光明が五趣生死の衆生を照し出して苦患を受けて居るものが悉く出現する。即ち此の下に種々の地獄の苦相が委しく述べられてある。されば此の經典に現はれた地獄の相は正法念處經のそれと等しく釋尊の大悲心に顯現したものである。たとひ此の經典の成立を釋尊の滅後四五世紀程以後に取つたとしても此の經典誦出者が釋尊

の心上に此の禪定の境界を認めたのであるから、釋尊の大悲が如何に苦惱の衆生を見られたかといふことを跡づけることになる。

さて地獄の名稱は餘程正法念處經とは異つて居る。阿鼻地獄だけは同じであるが、其他には十八小地獄、十八寒地獄、十八黑闇地獄、十八小熱地獄、十八刀輪地獄、十八鉞輪地獄、十八火車地獄、十八沸屎地獄、十八鑊湯地獄、十八灰河地獄、十八鐵窟地獄、十八鐵丸地獄、十八尖石地獄、十八飲銅地獄といふ風にみな十八の數になつて居るのは、佛敎地獄が通常は八の倍數から成り立つて居るのに對して異數である。又五百億釵林地獄、五百億刺林地獄、五百億銅柱地獄、五百億鐵機地獄、五百億鐵網地獄といふ風に數へ立て、居る、これで見ると地獄の數は無數であるといふことを示したのも見られる。

觀佛三昧海經では先づ第一に阿鼻地獄を擧げて居る、阿鼻とは無遮、無救、無間、無動、極熱、極惱、不閉、不住の義であると云ひ、委しく其の有様が説いてある。まづ縱横正しく八千由旬、七重の鐵城あり、七層の鐵網あり、網の下を十八に仕切つて

刀劍を植え並べ、十八區劃の一方は又八萬四千重に仕切られ、各重の四面に四十四由旬の四の大銅狗が居る、眼は電光の如く、牙は利劍の如く、一切の身毛からは猛火を吐き、其の煙の臭氣は喩ふるに物も無い。十八の獄卒は六十四の眼を輝かし、眼からは鐵丸を迸らせ、四由旬の牙は炎々たる火焰を吐く。頭上に八個の牛頭あり、一々の牛頭には十八の角あり、一々の角は皆火焰を吐く、四門の處に八十の釜ありて、沸え返る銅汁はあたりに充ち満ちて居る。一々の區劃に八萬四千の鐵の大蛇が居る。毒を吐き、火を吐き、咆哮の聲は奔雷の轟くやうである。又五百億の蟲は、八萬四千の嘴を有して居つて罪人を咬まうとして居るのである。

これが阿鼻地獄の苦具の有様である。而して罪人が此の地獄へ墮ち込む有様に至つては、巧に對照、反顯の筆法を用ひて、凄慘の光景を宛らに寫し出してある。即ち命終らんとする時、銅狗は化して黄金の車となり、罪人の枕邊へ迎ひに来る。見れば美はしい黄金の車、寶の天蓋は上にかゝり、優にやさしい少女が乗

り込んで居る。「あゝ奇麗だ乗りたいものだ」と思ふ。矢先に刀のやうな寒風が吹き来つて肌を劈くやうに感ずる。寒さの餘りに火にあたりたいと思ふ。思ふとそのまゝ命は終つて車の上に乗ら込む。美はしい少女と見えたのが此の時鐵の斧を取つて我身に斬り付ける。下からは火焰が渦巻をなして燃え上る。忽ちの内に阿鼻地獄の一番上の區劃へ落ち込むのである。かくて十八區劃を貫いて最下の區劃まで逆巻く火焰のやうに廻りながら落ちて行き、八萬四千重の其の中を経めぐるのである。

黒闇地獄に墮ち込むものは命終る時に強烈な電光が眼に見える。閃々として眩しさに堪へず何の報ひでこのやうに眩しいのか何卒して光を見ないところへ行きたいものであると思ふ。かくて命終つて鐵の床の上に坐り、鳥の飛ぶやうに黒闇の處へ落ちて行く、五百萬億歳明を求めて得られない、刀劍に切られ鐵の鳥に啄かれ黒山のために頭を打たれて苦しむのである。

刀輪地獄に落ち込む罪人は、命終る時に胸のあたりが張りつめて、苦しいあま

りに何卒して利刀でこの張りつめた箇處を切り開いて欲しいものであると思ふ。すると其の時、獄卒は罪人のところへ来て、物やさしく、「俺はよく切れる刀を持つて来たから、切り開いてやらう」と云ふ。これを聞いて喜んで命終ると刀輪の上に生じ、醉象のやうに走つて刀山の谷間に墮ちる。四山忽ちに合して身を切り割り、苦痛に堪へず悶絶すれば、獄卒は又もや急ぎ立て、山の上へ登らせる。かくて永々の間云ふべからざる苦痛を受けるのである。

鑊湯地獄へ落ちる罪人は、命終の時身心の苦痛に堪へ兼ねて、覺えず大小便を漏らし、或は總身火のやうに熱し、或は總身氷のやうに冷え渡る。そこで何卒して温湯の中へ這入つてこの汗を洗つたら、嘸かし心地がよからうと思ふと、其の時獄卒は僕の姿となつて湯壺を手を擎げてやつて来る。これを見て喜ぶと、命終つて鑊湯の中に生れ、永らくの間煮爛らされるのである。

又銅柱地獄といふのは、高さ六百由旬の大山のやうな銅柱が立つて居る。下には猛火が炎々として燃え、火の上には鐵の床があり、其の上に刀輪を植え、其の

間には鐵の嘴ある蟲鐵の鳥が飛び廻つて居る。此の地獄へ落ちる罪人は命終る時身體がふる／＼と顛ひそり反て弓のやうになり、鞭轉として定まらない。その苦しみの餘りに何卒して一つの大銅柱のやうな、しつかりしたものに身體を縛り付けて動かないやうにしたらば嘸かし氣持が佳いだらうと思ふ。其の時に獄卒は僕の姿になつて一本の鐵の杖を手につけてやつて來て云ふやうには、「旦那は今身體がくね／＼と曲るから、この杖につかまつてしつかりなさい」とこれを開ひて喜ぶと其のまゝ命終つて銅柱の上に生れる。猛火は熾に身を焦すに驚いて下の鐵床を見れば美しい婦人が居る。愛着の心を起して銅柱から飛び下れば鐵網身に纏はり鐵床の上に落ちて男女相會すると六根から一時に火が燃え上り、鐵蟲は眼から入つて男女根より出で、永らくの間かくして苦惱を受けるのである。

尖石地獄といふのは、二十五の石山があつて、一々の石山の間に八つの氷の池がある、一々の氷の池には五つの毒蛇が居る。此の地獄に墮ちる罪人は、命終の

時に胸がつかへ、腹が張つて太鼓の如く、飲食はすべて吐き出して仕まふ。水も咽喉を下らぬといふ苦しさに、不圖一つの尖つた石で咽喉を貫いたら心地善からうと思ふ。其の時に獄卒は醫者の姿となつて尖つた石を持つてやつて來て口中へ入れて呉れる、そこで大に喜んで命終ると其のまゝ石山の間に生じて數限りもない尖石が背から胸の方へ貫く。この處で永く苦惱を受けた揚句、黒繩地獄へ落ち込むとなつて居る。而して寒氷を苦具としたのは此の地獄に於て始めて見るところであつて、注意すべき點である。

飲銅地獄に落ちる罪人は命終る時に、口中が渴いて果實が欲しいと思ひ、讒語を口走る。其の時獄卒は銅の車に果實を一杯積み載せてやつて來る。罪人これをみて、さても嬉しいことである、こんな美味い果實が喰ひたいだけ喰はれる哩と喜んで命終ると其のまゝ銅の車の上に乗つて銅山の間に往き、溶銅を飲まされて永らくの間苦惱を受けるのである。

以上は觀佛三昧海經に於ける地獄の苦相に就て其の一斑を窺つたのである

第四章 起世經

起世經は十卷の經典である。其中第二卷の終りの方から第四卷の終りに至るまで委しく地獄の有様が説いてある。

抑もこの起世經は、其の名のやうに、世界の成立から、其の中の生類、天人、阿修羅等の有様を説いた經典であつて、佛が曾て舍衛城に在した時、ある日多くの比丘達が食事の済んだ後で、講堂の中に集つて種々の物語をして居つたが、誰が云ひ出すともなく、「時に不思議な事では無いか、吾々の棲まつて居る此の世界は如何して出来たのであらうか、又如何して破壊するのであらうか。寔に奇妙な事である」と話し合つたが、さて誰一人としてこれに適確な斷定をすることも出来なかつた。すると佛は天耳通でもつて遙か向ふの方で、この比丘達の話を聞いて居られたが、其の日の夕暮時分になると、靜に禪定から起つて、講堂の方へ御出かけになつた。而して例の如く比丘達の前法座の上に御坐りになつて、儼然として、故に比丘達に尋ねられた。「御前達は今日此處で何を話し合つて居つ

たか」比丘達はありのまゝを申し上げると、佛は答へて、「宜しい結構な事である。お前達家を出て修行をするからには、常に二種の方法に依るべきである。一には黙して聖者の語を信受する。又一には互に議論を上下して天地の秘奥を研めんとする。この二つに注意をせねばならぬ。俺は今から如何にしてこの世界が成立し、又如何にして破壊し去るものなるかを説いて聞かせやう」と云はれた。比丘達は喜んで佛の説法に傾聴した。

かくて、閻浮洲のこと、北俱盧洲のこと、地獄のこと、金翅鳥のこと、阿修羅のこと、四天王、忉利天のこと、世界滅亡の模様、世界成立の初めなどの事が説いてある。起世經には、地獄の位置を定めて、鐵圍山の中に在りとして居るところが、注意すべき點である。即ち須彌山の周圍を取り巻いて居る、澤山の洲と澤山の海の外側を包んで居る山を鐵圍山と云ふ。高さも廣さも長さも共に六百八十萬由旬であつて、堅牢なること、金剛の如く、如何なるものも破壊することは出来ぬ。この鐵圍山の外側に更にまた一大鐵圍山が取り巻いて居る。高さ廣さも長さは

前の如くである。この兩鐵圍山の間は黒闇々として更に光明を見ることが出来ぬ。日月の威光もこの境界を照さない。この黒闇の中に八大地獄が存在して居る。即ち(一)活大地獄(二)黒繩大地獄(三)合大地獄(四)叫喚大地獄(五)大叫喚大地獄(六)熱惱大地獄(七)大熱惱大地獄(八)阿毗至大地獄である。これらの地獄は前の正法念處經の八大地獄と同様である。字面に二三の相違は有つても譯語の上の小異であつて原語に於ては同一であるに違ひない。

次に此の八大地獄に各五百由旬づゝの十六小地獄がある。即ち(一)黒雲沙地獄(二)糞屎泥地獄(三)又地獄(四)飢餓地獄(五)焦渴地獄(六)膿血地獄(七)一銅釜地獄(八)多銅釜地獄(九)鐵磔地獄(一〇)函量地獄(一一)雞地獄(一二)灰河地獄(一三)斫截地獄(一四)劒葉地獄(一五)狐狼地獄(一六)寒冰地獄である。此に注意すべきは此の十六小地獄は八大地獄の何れにも付屬して居る地獄で名稱はみな同一なのである。前の正法念處經のやうに八大地獄に各と特有の十六別處を夫々列擧して居るのとは異ふ。又此に始めて寒冰地獄と云ふのが見えて居ることも注意せねばならぬ。從來

では熱と云ふことが苦痛の大部分を占めて居た。此に寒冷といふことを苦具の中に數へ来るやうになつたのは印度に於ける地獄思想の一轉化であらう。

(一)黒雲沙地獄。虚空の中に大黒雲が起つて甚だしく熱沙を雨らす。其の熱沙飛び來つて罪人を打てば皮を焼き肉を焼き骨を焼き髓を焼く。

(二)糞屎泥地獄。罪人は糞泥の中に居る。其の糞泥熱沸して煙焰俱に出で罪人の手足耳鼻頭目身體一時に煮え爛れる。此の糞泥の中には多くの針口を有する鐵蟲が居つて皮肉骨髓を喰ひ破る。

(三)五叉地獄。罪人は熱鐵の大地に置かれ烟焰洞然として起り罪人は其の中に悶えて仰臥すれば獄卒は兩つの熱鐵の釘を以て兩足を釘付けにし又兩つの熱鐵の釘を以て兩手を釘付けにし臍のあたりにまた一釘を下し其の上五叉の鉾を以て五體を磔く。

(四)飢餓地獄。獄卒來つて罪人に「何が欲しいか」と尋ねる。罪人は「空腹で苦しいから何か呉れ」と云ふ。すると獄卒は罪人を連れて熱鐵の地上に置き、

鐵の鉗で口を開かせ熱鐵丸を取つて口中に擲げる。唇から舌から顎から、咽喉から胸から腹を通つて下から落ちる。身體悉く焼け爛れて、苦痛云はん方もなく烈しい。鐵丸は尙ほ原の如く紅色である。

(五) 焦渴地獄。獄卒來つて罪人に「何が欲しいか」と尋ねる。罪人は「咽喉が渴いて苦しいから何か飲ませて呉れ」と云ふ。すると獄卒は罪人を連れて熱鐵の地上に置き、鐵の鉗で口を開かせ、赤銅汁を取つて口中に灌ぎかける。唇から舌から顎から、咽喉から胸から腹を通つて下から流れ出す。身體悉く焼けて爛れて苦痛云はん方もなく烈しい。

(六) 膿血地獄。膿血の充滿した池があつて、其の膿血は悉く熱し沸き返つて居る。罪人は其の池の中に首の處まで沈んで、東西に流され、南北に漂はされ、手足耳鼻を爛らされて具さに苦痛を受ける。又この膿血の池に最猛勝と云ふ蟲が居て、罪人の皮肉骨髓を喰ひ破る。然るに此の膿血の池の中で苦しみなながらも罪人はやはり飢渴に逼つて時にはこの熱沸の膿血を掬ひ取つて口中に入れ

る。すると唇から顎から舌から、咽喉から胸から腹を通つて下から流れ出し、身體悉く爛れて苦痛云はん方もなく烈しい。

(七) 銅釜地獄。罪人は一大銅釜の中に入れられ、熱湯の中に煮られるのである。頭は下に向ひ、足は上に向ひ、釜の下には業火の焰が猛烈として相迫れば、熱湯は沸々として、上に昇り、中に舞ひ込み、下に沈み、其の度毎に煮られ爛らされる。恰も世間で釜の中に小豆、大豆、豌豆などを入れて煮る時の如くである。罪人は湯の沸きかへるに随つて或は上り或は沈む。獄卒は傍に在つて、頭を下に向け、足を上に向けしめる。

(八) 多銅釜地獄。前の一銅釜小地獄の如く、釜の中で煮られ爛らせられるのであるが、此小地獄では多くの釜がある。獄卒は鐵爪を以て罪人を漉し取つて、釜から釜へと次第に煮て廻る。一つの釜を出で、又他の釜に入り、膿血皮肉悉く縦横に流れ散つて、最後に骸骨を残すのみとなる。

(九) 鐵磔地獄。獄卒は罪人を捉へて鐵砧の上に置き、猛焰一時に起つて罪人は仰

臥のまゝ悶絶する。其の時獄卒更に大石を取つて上から壓し潰し、粉微塵にせられても命は尙ほ盡きない。かくして再三再四極重の苦を受ける。

(二) 函量地獄 罪人を捉へて鐵の函を渡し、火を量らせる。其の函は極めて熱くて、眞紅の色をなして居る。手を焼き、足を焼き、耳を焼き、鼻を焼き、一切の身分を焼かれても命は尙ほ盡きない。かくして苦を受ける。

(二) 鷄地獄 この地獄には只鷄ばかりが居る。地獄の一面に鷄が充ち満ちて居る。其の鷄の足から脛から、身分一切は熱焰猛に起り、觸るゝところ悉く焼き焦す。罪人は東西に馳り回つて、手を焼き、足を焼き、耳を焼き、鼻を焼き、一切身分一時に洞然として痛苦を受けても命は尙ほ盡きない。

(三) 灰河地獄 灰河流れ注ぎ、其の早きこと矢を射ることく、波浪高く騰つて、其音撃々としてすさまじい。灰水は兩岸に沸り溢れて居る。罪人は流れに随つて灰河の中に浮きつ沈みつして居る。河の底は悉く鋭い鐵の鋒を植え付け、兩岸には劍葉の林あり。又鋭き棘のシャールマリ一樹あり、罪人は河底の鋒に傷け

られ、岸に上つて、劍葉に斬られ、熱鐵丸を飲まされる。又黒い恐ろしい狗が澤山に居て、罪人を取り食らふ。

(三) 斫截地獄 罪人を熾然たる熱地の上に臥さしめ、大なる鐵斧の猛焰赫々たるを以て、手を斫り、脚を斫り、耳を斫り、鼻を斫り、一切の身分を悉く斫り盡す。而も業報の命未だ盡きずして再三再四この苦を受ける。

(四) 劍葉地獄 罪人この地獄に入れば、業風忽ち吹き來りて、諸の鐵葉を吹くに鐵葉利劍の如く、空中より落ち來りて、罪人の一切の身分を截る。手を截り、脚を截り、耳を截り、鼻を截り、業報の盡きざる間は、繰り返してこの極苦を受ける。

(五) 狐狼地獄 業果によりてこの地獄の中には狐狼を生じて居る。猛惡にして吼ゆる聲甚だ恐るべく、罪人のあらゆる身分を噛み食らふ。業報の盡きざる間は、繰り返してこの極苦を受ける。

(六) 寒氷地獄 罪人この地獄に入れば、業報によつて忽ち寒冷の風四面より吹き起り、寒氣大に身に逼り觸るゝところ悉く破裂する。皮破裂し、肉破裂し、筋破

裂し骨破裂し髓破裂し云はん方なき大苦痛を受ける。從來苦具には必ず熱焰熱鐵等を用ひて居たのに對して此の地獄には寒氷を苦具としたるを注意せねばならぬ。前に『觀佛三昧海經』の地獄を述べた中に尖石地獄と云ふ地獄があり其の地獄の中には二十五の石山があり、一々の石山の間に八つの氷の池があると見えて居たがそれは只氷の池が有ると云ふまでであつて、まだ十分に苦具とはなつて居ない。然るにこの寒氷地獄では明かに一步を進めて寒氣が苦具の一つとなつて居る。これは後に八寒地獄と云ふものになるのであらうと思はれる。即ち八寒地獄は決して始めから八熱地獄と肩を並べて存在したものでは無。始めは恚ういふやうな附屬地獄であつたのだが何時しか八熱地獄に相對して八寒地獄の名を得るやうになつたのであらう。而して其の八寒地獄の名稱と同じ名稱が已にこの經典の上に見えて居るのを注意せねばならぬ。即ち黑繩衆合叫喚大叫喚焦熱大焦熱阿鼻と次第に叙述を進めて行つて各地獄に以上の如く黑雲沙地獄から寒氷地獄までの十六の小地獄があることを述

べ次に又更に十個の地獄があると云ふ。其の十地獄と云ふのは即ち(一)類浮陀地獄(二)尼羅浮陀地獄(三)阿呼地獄(四)呼々婆地獄(五)阿吒々地獄(六)攝健提迦地獄(七)優鉢羅地獄(八)波頭摩地獄(九)奔茶黎迦地獄(十)拘牟陀地獄これである。この十地獄の中、序の如く(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)が八寒地獄の第一から第七に當るのであつて、この(八)から若し摩訶波頭摩即ち大紅蓮を開き出せば恰ど八寒地獄が具足する譯である。然しながら此の經典ではまだ寒地獄とはなつて居ない。否立派な熱地獄である。それは六以下の地獄は序の如く白蓮華青蓮華紅蓮華白蓮華黃蓮華の五種の蓮華の色をした火焰が漲つて居るから此の名を得たとなつて居る。(一)と(二)は罪人の身體の形狀によつて得た名稱である。即ち(一)は罪人の身が泡沫のやうである。(二)は罪人の身が肉片のやうであるとなつて居る。(三)(四)(五)の三地獄は苦痛のあまり泣き叫ぶ聲によつて得た名稱である。更に注意すべきは此の處に閻魔王の宮殿の有様が述べてあることである。即ち閻浮洲の南の方鐵圍山外に當りて閻魔王の宮殿がある。縱廣六千由旬で

ある。七重の墻壁、七重の欄楯、七重の鈴網、七重の並樹、宮殿樓閣は金銀七寶を以て飾り立て、園には美しき花咲き揃ひ、樹々の葉は茂り合ひ、甘き果實は枝の間に生じ、花の薫り鳥の聲は云はん方なく、樂い處である。然るに閻魔王はこの宮殿の中にあつて、その罪業のために晝三度と夜三度に苦を受ける。即ち自然に赤熱の銅汁が其の前に現出する。此の時王宮は忽ちに變じて鐵となり、五欲の快樂は悉く消えてしまふ。閻魔王若し宮殿の中に居れば、宮殿内にこの變化が起る。若し宮殿の外に居れば、宮殿外にこの變化が起る。すると閻魔王は恐怖のあまり毛髮豎立して、忽ちに逃げ出さんとするを獄卒はこれを捉へて熱鐵の上におさしめ、赤熱の銅汁を飲ませる。閻魔王此の時心の中に次生には必ず佛道修行の人となつて二度とはこの生を受けまいと思ふ。すると、又もや宮殿は變じて七寶となり、五欲の快樂が出現する。

此の閻魔王が苦患を受けると云ふ叙述は、吠陀時代のヤマ神が冥界の王となるやうになつた移り行きの有様を善く示して居る。即ち此處ではヤマ即ち閻

魔王は半ば審判の王者と化して居るが、まだ半ば人類の祖先といふ域に留まつて居るのである。七寶莊嚴の宮殿は又夜摩天と比較すべきものである。五欲の快樂が晝夜六時の苦患のために中斷されるところは閻魔王がまだ人間の域を離れて居ない云は、淨罪界煉獄とも云ふべきところである。これが後には罪人の審判者となるに至るのである。

次に三天使の挿話が頗る興味あるものである。三天使とは曰く「老」と「病」と「死」とである。惡業の人若し命終つて地獄に行けば、獄卒はこの人をつれて閻魔王の許へ行く。閻魔王もはや此の時は罪人の審判者として教誡者の位置に立つて居る。即ち罪人に尋ねて云ふやう、「御身人間に在りし時、われ第一の天使を遣はして、懇に教誡を垂れた筈であるが、逢うたであらう」。罪人答へて、「一向に存じませぬ」と云ふ。閻魔王の云ふやう、「何の存せぬことがあらう。人身を受けたるもの男にもあれ、女にもあれ、老衰に及べば齒落ち、髮白く、額には波を湛へ、腰は弓のやうに曲り、唇乾き、舌澁り、氣力衰へて、漸く杖にすがつて歩

行いて居る。あの老人を御身は見ないと云ふのか。罪人答へて、「存じて居ります。」「愚かな奴よ、これこそ我が遣はした第一の天使である。」

次にまた第二の天使を遣はしたが、見たであらう。「一向に存じませぬ。」「何の存せぬことがあらう。人身を受けたるもの男にもあれ、女にもあれ、病苦に侵され、臥床の上に横たはり糞屎に穢れて、展轉反側し、飲むも食ふも人手を借らねばならぬ有様を御身は見ないと云ふのか。」「存じて居ります。」「愚かな奴よ、これこそ我が遣はした第二の天使である。」

次にまた第三の天使を遣はしたが見たであらう。「一向に存じませぬ。」「何の存せぬことがあらう。人身を受けたるもの男にもあれ、女にもあれ、命終れば葬衣を着せて、臺の上に乗せ、家族隣人が取り巻いて泣きながら野邊に送る有様を御身は見ないと云ふのか。」「存じて居ります。」「愚かな奴よ、これこそ我が遣はした第三の天使である。」

かくも、一度ならず、二度ならず、三度まで、天使をやつて、懇に教誡して置くの

に、愚痴の者よ、心放逸にして更に後世の營みを爲さず、業報によつて此處に來れる御身は何たる癡者ぞ」と苛責せられて地獄の中へ眞逆さまに落されるのである。

註(一)「起世經」は或は「起世因本經」と題して、隋朝の闍那崛多の譯と、達摩笈多の譯と、二本が藏中に見ゆる。麗藏に據つて出版した新藏經では闍那崛多の譯を「起世經」とし、達摩笈多の譯を「起世因本經」として居る。然し兩經は固より同本の異譯であつて、大同小異、別に取り立て、云ふ程の差異も見えない。然るに西晋の代に法立、法炬の二人の沙門の共譯に成る「大樓炭經」と云ふ六卷の經典がある。これが亦明かに「起世經」の同本異譯である。又「長阿含經」の第十八卷以下第二十二卷までの五卷は「第四分世起經」と題して明かに亦この「起世經」の同本異譯であらうと思はれる。而して「長阿含經」の譯者は後秦の代佛陀耶舎と竺佛念の二人である。左にこれら四經の品名を比較對照して見やう。

「大樓炭經」	「長阿含經」第十八	「起世經」	「起世因本經」
(一) 閻浮利品	(一) 閻浮提州品	(一) 閻浮洲品	(一) 閻浮洲品
(二) 鬱單日品	(二) 鬱單日品	(二) 鬱單越洲品	(二) 鬱多羅究留洲品
(三) 轉輪聖王品	(三) 轉輪聖王品	(三) 轉輪聖王品	(三) 轉輪聖王品
(四) 泥犁品	(四) 地獄品	(四) 地獄品	(四) 地獄品
(五) 龍鳥品	(五) 龍鳥品	(五) 金翅鳥品	(五) 諸龍金翅鳥品
(六) 阿須倫品	(六) 阿須倫品	(六) 阿修羅品	(六) 阿修羅品

(八) 四天王品 (七) 四天王品 (七) 四天王品
 (九) 初利天品 (八) 初利天品 (八) 三十三天品 (八) 三十三天品
 (一〇) 戰鬪品 (一〇) 戰鬪品 (九) 鬪戰品 (九) 鬪戰品
 (一一) 三小劫品 (九) 三災品 (一〇) 却住品 (一〇) 劫住品
 (一二) 災變品 (一二) 三中劫品 (一一) 世住品 (一一) 住世品
 (一三) 天地成成 (一三) 世本緣品 (一二) 最勝品 (一二) 最勝品

但し「大樓炭經」には、(七)高善士品の一品を開き、(二)三小劫品より下は聊か次第に雜亂があつて適切に對照し難いが、大體に於て、右の品名對照を見るならば、誰しも此の四經の同本異譯であることを否定することは出来まい。「樓炭」の名稱は恐らくはローカ、アンタラでは無からうか。果して然らば「次の世界の意であらう。鬼にかく他の三經と等しく世界に關した名稱たることは疑を容れないところである。

さてこの「大樓炭經」なるものは早くも西紀三世紀のころ單獨に支那に翻譯せられ別行せられた。それから七八十年を経て後晋の時には「長阿含經」の一部分として續傳された。それから又二百年程の後に「起世經」として再び別行せられ、續傳されたのである。これでは前にも述べたが「長阿含經」のこの部分は明かに後世の附加であることを斷言し得ると思ふ。このことは南方所傳の「長阿含經」に比較すれば一層明白である。

註(二) 鐵圍山は梵名「チャクラヴァティン」、正しく云へば輪圍山とする方が可い。今は只一般の稱呼に従つたまでである。
 註(三) 八大地獄の第一の名を「大樓炭經」及「長阿含經」には「想」としてある。「起世經」の「活」と大に異なるが如く思

はれるが、原語は甚だ似て居る「活」の原語は「サンシヴ」であり、「想」の原語は「サンジュニキヤ」であるから又第二の名を「大樓炭經」には「黒耳」とし、他の三經には「黒繩」として居る。これも「黒耳」は「カーラ、シユロートラ」を譯したので、「黒繩」は「カーラ、スートラ」を譯したのであらう。

註(四) 十地獄の名稱につき異譯對照をすれば次の如くである。

「大樓炭經」	「長阿含經」	「起世經」	「起世因本經」
(一) 阿 浮	(一) 厚 雲	(一) 類 浮 陀	(一) 類 浮 陀
(二) 尼 羅 浮	(二) 無 雲	(二) 尼 羅 浮 陀	(二) 泥 羅 浮 陀
(三) 阿 呵 不	(三) 阿 呵	(三) 阿 呼	(三) 阿 浮
(四) 波 波 不	(四) 奈 何	(四) 呼 呼 婆	(四) 呼 呼 婆
(五) 阿 羅 留	(五) 羊 鳴	(五) 阿 吒 吒	(五) 阿 吒 吒
(六) 修 犍	(六) 修 乾 提	(六) 搔 犍 提 迦	(六) 搔 犍 提 迦
(七) 優 鉢 鉢	(七) 優 鉢 鉢 羅	(七) 優 鉢 鉢 羅	(七) 優 鉢 鉢 羅
(八) 速 華	(八) 鉢 頭 摩	(八) 波 頭 摩	(八) 波 頭 摩
(九) 分 陀 利	(九) 分 陀 利	(九) 奔 茶 梨 迦	(九) 奔 茶 梨 迦
(一〇) 拘 文	(一〇) 拘 物 頭	(一〇) 拘 牟 陀	(一〇) 究 牟 陀

この中(二)の原語「アブラ」であつたのが「大樓炭經」の「阿浮」(雲氣)及び「長阿含經」の「厚雲」となり、「アブラ」であつた

たのが「起世經」及び「起世因本經」の「阿浮陀」(泡沫)となつたのである。同様にして(二)の原語も、「大樓炭經」の「尼羅浮」
「起世經」の「尼羅浮陀」、「起世因本經」の「泥羅浮陀」は共に「ニラルブダ」であつて、「長阿含經」の「無雲」(「ニラブフ」
を譯したものであらう。原語では極めて混じ易い形である。

註(五) (六)から(一〇)に至る五地獄の名稱はみな蓮華の名稱である。即ち「起世經」起世因本經の順序に隨へば
(六)「スガンドヒカ、これは「芳香」あるの義、白蓮華である。(七)「ワトバラ」(八)「マドマ」(九)「アンダリーカ」(一〇)「クムダ」
は序の如く「青蓮」「紅蓮」「白蓮」「黄蓮」である。

註(六) 吠陀のヤマ神に關しては、極樂論の中に述べる。

第五章 泥 犂 經

泥犂經具さには佛說泥犂經と云ふ。此經典は二部分になつて居る。前分では廣く地獄の苦患に就て述べ、後分では八地獄の苦相を説いて居る。

佛はまづ苦痛と云ふことから説き起して、苦痛にも種々あるが、その最も忍ぶべからざるものは地獄の苦に及ぶものは無いと云ひ、比丘達が熱心にその地獄の苦痛を聞かんと願ふに對して佛はまづ譬喩を説いて居られる。「官の役人が

謀叛人を捕へた、そしてその謀叛人を王の前へ引張り出して、「このものは叛逆を企てました不届き至極の奴で御座います」と申し上げた。すると王は直様これに命じて鋒を以て一百の瘡をつけさせた。又翌日になつて生きて居たから更に一百の瘡をつけさせた。又その翌日になつてまだ生きて居たから更にその上に一百の瘡をつけさせた。さてこの人、三百の瘡をつけられて、身體殆んど瘡ばかりである。もはや棗の葉の大きき程のところも満足な膚が無い。かくしてこの人は如何ばかり苦痛を覺えることであらうか。比丘達聲を揃へて申すやう、「一瘡すら舉身が痛むのに、まして三百の瘡をつけられては何とも譬へ方なき苦痛を覺えることでありましやう。其の時佛は忽ち一個の小石を拾つて手の中に置き、比丘達に示して云はるゝやう、「この小石と山嶽とは何方が大きいであらうか」「申す迄もありませぬ。御手の中の小石は山嶽に比べては山嶽の方が幾億萬倍、それでも尙ほ山嶽の大きさに及びますまい」佛は直に言葉を繼いで、「三百の瘡の痛さはこの小石の如くである。地獄の苦痛は山嶽

の如くである」と云はれた。

獄卒或は鉤を以て罪人を吊し口を開かせて洋銅を流し込み或は熱鐵の杵を咽喉の中に入れ或は鐵山に追ひ上げて火を以て山を焼けば山は灼熱して紅赤の色と變じ罪人は上に走りて苦しむあり或は熱鐵の斧を振つて罪人の手足を斬り或は罪人の腦漿を啄む鳥あり或は罪人を引き裂き食ふ獸あり。或は刀を以て兩の脇腹の皮を剥ぎ鐵車を引かして火の上を行かしむるあり或は釜の中に投げ入れられ豆を煎るやうに沸々と煮られ或は熱鐵の釘を以て兩手兩足を釘づけられる等様々の苦を受ける。

又炭火の中に入つて焼かれ焦され暫らくも休息することが無い。又寒氷の中に入れれば縱廣數千里寒さは骨を刺し身戰慄し肉破裂して苦痛云はん方も無い。又熱沸せる尿泥があり膿血があり剃刀の山があり劍樹の林があり鐵の蘆竹悉く利刀の如きあり熱沸の鹹水ありといふやうに大體に就て地獄の苦具を種々に擧げてある。

次に後分の始めの方には起世經と同じく閻魔王の訊問が出してある。只起世經では老病死の三天使になつて居るのが此處ではこれに刑戮の一を加へて更に總じての訊問と合せて五問としてあるのが違ふだけである。即ち罪人閻魔王の前に牽かれて行けば王即ち問ふて云ふ「何故御前は惡業を造つたのか」罪人答へて云ふ「實に自分の愚癡からで御座りまする」。「然らば誰の所爲でもない。自業自得であるぞ」。これが第一問である。次に「御前は世にあつた時病人を見なかつたか」「見ました」。「何故にそれを見て自分の上と知り心を改めなかつたか」。「實に自分の愚癡からで御座りまする」。「然らば誰の所爲でもない。自業自得であるぞ」。これが第二問である。次にまた「御前は世にあつた時老人を見なかつたか」。「見ました」。「何故にそれを見て自分の上と知り心を改めなかつたか」。「實に自分の愚癡からで御座りまする」。「然らば誰の所爲でもない。自業自得であるぞ」。これが第三問である。次にまた「御前は世にあつた時死人を見なかつたか」。「見ました」。「何故それを見て自分の上と知り

心を改めなかつたか。「實に自分の愚癡からで御座りまする」。然らば誰の所爲でもない。自業自得であるぞ。これが第四問である。次にまた「御前は世にあつた時役人が人殺しや盜賊を捕へて、或は拷問し、或は殺すのを見なかつたか。「見ました」。何故にそれを見て自分の上と知り、心を改めなかつたか。「實に自分の愚癡からで御座りまする」。然らば誰の所爲でもない。自業自得であるぞ。これが第五問である。この第五問が済めば獄卒は罪人を連れて一大鐵城に引いて行く。これが地獄であつて、此處に地獄がある。その八地獄の名稱も順序も、餘程前述のものと同違つてゐる。

八地獄の名稱は即ち(一)阿鼻摩泥犁、(二)鳩延泥犁、(三)彌離摩德泥犁、(四)崩多羅泥犁、(五)阿夷波多洹泥犁、(六)阿喻慘波犁洹泥犁、(七)熱徒務泥犁、(八)檀尼愈泥犁、是れである。此の中、阿鼻摩泥犁は前の阿鼻若くば阿鼻至であらう。

(一)阿鼻摩泥犁には四門あり、周圍四千里中に大釜があつて、深さ四十里、縱横また四十里、獄中遍く火焰あり、罪人此の中に入れば、數千萬年の間出ることが出來

ぬ。火も消えない。たま／＼東門開くと見て、罪争つて走り行けば、行き着くと共に、忽ち閉ぢてしまつて出られない。南門、西門、北門、また此の如くに開くかと思れば、忽ち閉ぢるのである。

(二)鳩延泥犁では足を下せば、足は熱地に焦げ着き、足を擧げれば肉もこの如く生ずる。かくて東に走るもの、南に走るもの、西に走るもの、北に走るもの、數千萬年の間、熱地の上を走り廻るのである。

(三)彌離摩德泥犁の中には、掘塚と云ふ蟲が居る。頭黒くして、嘴は鐵のやうである。この蟲罪人を見れば、みな來つて啄み、肉も骨も髓も盡く啄まれる。數千萬年の間、かやうな苦を受けるのである。

(四)崩多羅泥犁の中には、利刀の如き石がある。罪人はみな其上を走り廻りて、脱れ出やうとしてゐる。而も數千萬年の間、脱れ出ることが出來ず、足は截られ、割られて、甚しき苦痛を受けるのである。

(五)阿夷波多洹泥犁では、熱風起つて、其の熱きこと世の炭火の熱さよりも遙に

熱い。罪人はこれを脱れやうとして逃げ廻るが常にこの熱風に吹かれて身を焦し、數千萬年の間、苦を受けるのである。

(六) 阿喩慘波犂泥犂には多くの樹がある。樹はみな鋭く尖つて居る。樹の間に鬼あり。頭上よりも口中よりも火焰を吐き、身體すべてに十六の針がある。罪人を見れば大に火を吐き、十六の針で貫き引き裂き食ふ、かくて數千萬年間、苦を受けるのである。

(七) 熱徒務泥犂では教といふ蟲が居る。此の蟲飛び來つて、罪人の口中に入り、身體に喰ひ入る。罪人脱れやうとすればする程、蟲は愈々喰ひ入る。かくて數千萬年の間、苦を受けるのである。

(八) 檀尼愈泥犂には熱湯の川が流れて居る。罪人は其の中に漂はされ、煮え爛れて岸に上らんとすれば岸には荆棘あり、獄卒は鋒を以て下流に押し流す。押し流されて下流に至れば、また獄卒が居て「何處から來か」と問ふ。罪人は答へ「何處から來たか、何處へ行くか、わかりませぬ。只飢え渴いて苦しいばかりで

ありまする」。其の時獄卒「食物をやらう」と云ふて洋銅を罪人の口の中に注ぎ、腹中委く焼く焦される。

罪報盡きれば第八から第七に送られ、第七から第六第五と云ふ風に再び第一の阿鼻摩泥犂へ還り、閻魔王の誠を受けて人間に還り、正道を行ひ、再びとは地獄に行かぬと云ふ。以てこの地獄の餘程前のものと違ふところを見るべきである。

註(一) 泥犂は「ニラヤ」と云ふ梵語の音を寫したので、譯して無幸處と云ふ。やはり地獄のことである。奈落迦とは言葉は全く異ふが同じものである。

註(二) 「佛說泥犂經」は東晋の代に西域沙門竺曇無蘭譯となつて居る。數紙に過ぎない短い經典である。而して別にまた同人の譯にかゝる「佛說鐵城泥犂經」と云ふ經典がある。これは「佛說泥犂經」の中の後分の別譯である。「泥犂經」を叙述するからには當然含まれる譯合だから「佛說鐵城泥犂經」に就いては云ふ必要がない。

註(三) 尙ほ此の仙藏中に「佛說十八泥犂經」なる經典がある。後漢の安清高の譯するところ、十八泥犂とは一先就乎、二居處、卒略、三桑居都、四樓、五旁卒、六草鳥車次、七都意羅且、八不虛都般呼、九烏竟都、一〇泥犂都、一一烏時、一二烏滿、一三烏藉、一四烏呼、一五須健渠、一六末頭乾直呼、一七區通塗、一八沈莫である。これは何れの經典にも類似のない名稱であつて全く別のものらしい。音譯としても譯語と音寫と交錯して居つて、原語を想像し難い形である。然し若しも安清高の譯と

云ふことを正確だすれば、實に是れ地獄の名稱が支那に傳はつた最も古いものさ云ふことになるのである。

註(四) 又「佛說四泥犁經」といふ經典がある。やはり鐵城泥犁經と同じく東晋の代曇無讖の譯するところ。四泥犁とは一捨舍大泥犁、二羅波離大泥犁、三提婆達兜大泥犁、四末伽黎大泥犁である。此の中、二の羅波離とは善星比丘一所に傳へられる釋尊の弟子である。地獄に落ちたと云はれて居る。三の提婆達兜は提婆達多と原語は同じである。釋尊に敵對して地獄に墜ちたと云はれて居る。四末伽黎は外道の名である、仍て思ふにこれらの四地獄は特に一人の墜ちた所のものを以て地獄の名としたものらしい。これらによりても如何に地獄の名稱が經典によつて一定して居ないかを看取すべきである。

第六章 地藏本願經

母を亡くした一人の女、平生から宿縁深くして聞法の心あり、行住坐臥常に諸天善神の擁護を受けてゐる。それに引かへ、死んだ母と云ふのは、邪法を信じて常に三寶を輕んじ、放逸無慙の日暮しをしてゐた。女は常々母を勸めて正法に引き入れやうと種々に心を碎いてゐたが、圖らずもかりそめの病氣で母は死んだ。邪見の應報で、魂は無間地獄の中に墜ちた。女は母の存生中のことを思ひ合せて、必ず地獄に墜ちて居らねばならぬと思ひ、家宅を賣り拂つて香華燈明

供物を求め、佛塔の中に於て大供養を行つた。

時は恰も覺華定自在王如來の滅後未だ久しからざる頃である。如來の尊像はその佛塔の中に畫かれてあつた。威容端嚴にして云はん方もなく神々しく拜まれた。女は尊容を見たてまつりて益々信敬の思を生じ、あゝ如來は大覺の尊者である。一切の智慧を具足したまふ。若し在世の時ならば、必ずや我が母の居處を問ひ奉つて知ることも出来やうに、悲しい哉、恩顔今や空しく涅槃の雲にかくれて、親たり拜し奉るに術もないと、涙を流して悲しんで居ると、忽然として空中に聲あつて、「聖女よ、泣くことを止めよ、我れ今汝に母の去處を示さん」と云ふ。女は合掌して虚空に向ひ、「如何なる神にたまはしますぞ、我が悲しみを知つて、母の去處を示さんとは宜ふや」。空中の聲は再び答へて、「我はこれ汝が拜禮せる覺華定自在王如來なるぞ、汝が母を憶ふの情深きに愛で、告ぐるなり」と云ふ聲を聞くなり、女は喜悅のあまり五體を地に投じて禮拜をなし、「世尊よ、希くば母の生處を説きたまへ」と申し、告命の旨は供養を畢つたなら

ば早く家に歸り端坐して如來の名號を憶念せよと云ふことであつた。女は告命の如くに如來の名號を念すること一日一夜にして忽ち自分の身は一の海邊に到つた。

海水は沸々と湧き立つて居る。鐵身の惡獸は數多く海上を飛び走つて居る。百千萬の男女は海中に出沒して惡獸のために貪り食はれ種々の夜叉或は多手或は多眼或は多頭或は多足牙は利刃の如く口より出で恐ろしき有様は種々多様である。罪人を驅つて惡獸に近づかしめ或は自ら取り食ふ。その凄慘の光景は久しく見るに堪へられない。

一の鬼王來り迎へて云ふやう、「聖女よ何のために此處に來たまひしか」女鬼王に問ふ「此處は何處なるぞ」鬼王の云ふ。「これは大鐵圍山の西面の第一重海である」平生聞くところによれば鐵圍山の内に地獄があると云ふ。本當のことなるか「然り眞に地獄がある。然し神通力で行くか業力で墮ちるか何れかでなければ行くことは出來まじ」この湧き立つ海水は何であるぞ「これこ

そ南閻浮提の造惡の衆生が新に死んで四十九日を経た後繼嗣のものが功德を積まず自身善根もなければまづ自然に此の海を渡つて行くことになる。此の海の東十萬由旬に又一つの海があり。其の苦これに倍して居る。其の海の東に又一つの海があり其の苦また倍して居る。此の三箇處の海水を共に業海と名けて三業惡因の招くところである。「而して地獄は正しく何處に在るぞ」
「三海の内これ大地獄である大なるもの十八次なるもの五百又次なるもの千百いづれも苦毒無量である」時に我が母は平生邪法に惑ひ三寶を誹謗して居たのであるが死んで以來まだ幾何も經つて居ない。何處に生れて居るであらうか「種族は何々父の名は何々母の名は何々」と語るや否や鬼王は掌を合せて云ふやう、「聖女よ、希くば心を安んじて本處に還りたまへ、聖女の母天に生じて以來今日まで三日を経過して居る。聖女の供養の力によつて聖女の母の地獄を脱れしのみならず無間地獄の罪人も其の日悉く樂を受けることが出來たのである」と云ひ畢つて彼方へ去つた。

女は夢の如く家に還つた。此に於て覺華定自在王如來の塔像の前に一つの願ひを立てて、これより盡未來際苦惱の衆生を濟度せずば止まぬと誓つた。此の女が地藏菩薩となつたのである。

以上は經の第一品初利天宮神通品の一節である。

吾人は以上の叙述の中に、從來會て經論の上に認められなかつた新しい思想を認める。即ち新しく死んだものが、四十九日を経た後に、地獄に趣くと云ふ思想である。これらの思想から考へても、また經文の言語から考へても、地藏本願經の成立は他の經典に比して餘程後代のことでなければならぬと思はれる。

次に第三の觀衆生業緣品に、地藏菩薩は佛母摩耶夫人に對し無間地獄のことに就て委しく説いて居る。無間地獄は其の周圍八萬餘里である。其の城純鐵にして高さ一萬里、城上の火聚空缺が無い。其の城中に幾多の地獄が相連なつて、皆別々に名前もあるが、特に又無間と云ふ一地獄が其の中にある。其の地獄の周圍は一萬八千里、獄牆の高さは一千里、悉くこれ鐵から成る。上火下に徹

し、上火上に徹し鐵蛇鐵狗火を吐いて相驅逐して居る。獄中の床萬里に遍滿し一人苦を受くる時も、自分の身體は床の上一杯に擴がつて居るかのやうに覺え、るし、千萬人苦を受くる時も亦各自自分の身體が床の上一杯に滿ちて居るやうに覺える。百千の夜叉惡鬼牙は劍の如く、眼は電光の如く、手に銅爪あり、或は罪人を引つ掻き、或は大鐵戟を執つて罪人の身體を打ち、口鼻腹背を打ち、空に抛げ上げ、床上に打ち据る。或は鐵鷹あつて罪人の目を食らひ、或は鐵蛇が罪人の首を絞め、或は四肢五體に釘を打ち、舌を抜き、腸を抽き出し、斬りさいなみ、洋銅を口に灌ぎ、熱鐵を身に纏ふなど、萬死萬生の業苦を受け、此の世界若し滅すれば轉じて他の世界に行き、他の世界次第で滅すればまた他の世界に行き、展轉として廻り廻りて終る所が無い。

そこで無間と云ふのは、(一)受苦の劫數無限にして間絶する時が無いから名を得たのである。(二)又一人でも多人數でも身體が獄中に遍滿して居るから無間と云ふ。(三)又苦具相連接して少しの隙間も無いから無間と云ふ。(四)又男子

女人老幼貴賤胡夷戎狄を論せず悉く苦を受けるから無間と云ふ。(五)又此の地獄に入つてから百千劫に至るまで一念の間と雖も休むと云ふことが無いから無間と云ふのである。

又第五の地獄名號品に於て地藏菩薩は普賢菩薩に對して種々の地獄の名を説いて居る。然しこれ多くは苦具苦痛の有様から命名したものであつて、只順序なく排列したに過ぎない。これらは已に前に叙し來つた所の經典を繰り返すことになるから略することとする。

第七回 俱舍論世間品

以上予は種々の經典に顯はれた地獄の有様に就て、まづ一通りの叙述を終つた。序言にも云つたことであるが、地獄の記事を經典の上に求むれば、其箇處頗る多く、殆んど應接に遑なき有様である。而も其の叙述が互に相違して居り、一見蕪雜を極め、何等其の間に統一なきが如き感がある。これは經典が其の傳へ

られた地方の特色を帶んで來るために變化するのと長い間に一の傳説が幾らかづゝ變化してそれが積り積つて、非常な變化となつたの等、原因は種々あらうが、今これらの雜然たる傳説に歴史的の統一を見出すことは到底不可能である。印度の經典は全く年代の記録が缺けて居るために、どの經典が先に在つたのかわからぬ。而して共通の思想に對しても、影響した方と影響を受けた方とを判然區別することすら出來ない。只簡略なものや詳細なるものを比べ、また之を支那に翻譯された年代と合せ考へて僅かに思想の前後を想像するに過ぎないのである。予は此の點に就て何等具體的な斷案を下すことが出來ない。これは後日の機會に譲ることとして置いて、今最後に俱舍論世間品の地獄の思想を一瞥して見やうと思ふ。これは西紀四五世紀ごろの印度の智識ある階級に行はれて居た世界觀の一部を正確に撮要したものゝ代表的標型であらうと思はれる。随つて印度の諸經典に顯はれた地獄の叙述は此に至つて有らん限りの發達をし盡したものであり、この思想が玄奘の手によりて支那の方へ紹介

せられ支那幾代の民心を支配し來つたのであるから、上に擧げ來つた諸經典は此の俱舍論世間品の背景となつて居るのである。さればこれら經典を材料として出來上つた俱舍論世間品の地獄は佛敎地獄の結論として最も適當なものでは無からうか。

かゝる譯柄であるから俱舍論世間品に顯はれた地獄の記事は極めて整頓して居り、極めて計算的である。地獄の名稱は(一)等活地獄、(二)黑繩地獄、(三)衆合地獄、(四)號叫地獄、(五)大叫地獄、(六)炎熱地獄、(七)大熱地獄、(八)無間地獄である。地獄に中有があるか無いかと云ふ問題胎卵濕化の四生の中の化生に屬すると云ふ議論が頗る熱心に反覆されて居る。要するに中有はあると云ふことになつて居り、地獄へ墮ちる時は頭を下にし足を上にして行くと云ふことが、偈頌を引いて證明してある。

正しく世間品第四に至つて器世間の有様を詳しく説く最下に風輪あり、其の上に水輪あり、其上に金輪あり、其の上に蘇迷盧山聳え立ち、九山八海あり、最も外

側には鐵圍山が圍んで居る。此の間中央の七海は八功德水を湛へ、外側の一海は鹹水を満たしてある。其の中に南瞻部等の四洲がある。南瞻部洲の下の方二萬由旬を過ぎて、阿鼻旨大地獄がある。餘の七地獄は其の上に累なつて存在して居る。或は傍に存在して居ると云ふ説もある。而して八地獄に各十六づゝの増がある。

十六増とは八地獄の四面の門外に各四箇處の地獄がある。即ち(一)糖煨増謂くこの増の中には熱い灰が膝を没するばかりになつて居る。有情此に來つて足を下せば、皮肉は血と共に焦爛して墜つる。足を擧ぐれば本の如くなる。(二)尸糞増謂く此の中には尸糞泥が充滿して居り。澤山の娘矩吒蟲が針の如き嘴を持ち、白身黒頭にして、此に來る有情の皮を破り骨を破り髓を食らふ。(三)鋒刃増謂く此の中に三種あつて、一に刀及路、これは道の上に刀刃を仰向けに布いてある。此に來る有情足を下せば皮肉は血と共に斷たれ碎かれて墜ち足を擧ぐればまた本の如くに生ずる。二に劔葉林、これは利刀の林葉は悉く劔の

刃である。有情來るあれば、業風吹いて刀葉を飛び散らし、身を切り骨を切る。又鳥駭狗なる犬あつてこれを食らふと云ふ、三に鐵刺林、この林の上に長さ十六指の利鐵刺ありて、有情逼られて樹を上下すれば、その鐵刺のために身を傷つけられ、鐵柴鳥のために眼球を啄まれ食はる。これらの三を合して一増とする。最後に(四)烈河増、これは熱き鹹水の河である。有情中に入つて或は浮び、或は沈み、或は横になり、或は轉び蒸され焼かれ、煮られ、骨肉糜爛する有様は恰も大なる釜の中に灰汁を盛り麻米などを入れて、下から火を燃やせば麻米等は上下に回轉する有様のやうである。逃れんとするものあれば兩岸の獄卒は手に刀槍を執つて防ぎ妨げ出づることなからしめる。此の一増は河であり。前の三増は園のやうになつて居る。此に地獄の獄卒が有情なるや非情なるやの問題がある。

又八寒地獄が擧げてある。(一)頹部陀、(二)尼刺部陀、(三)頹嘶吒、(四)囉々婆、(五)婆(六)囉鉢羅、(七)鉢特摩、(八)摩訶鉢特摩、即ち是である。嚴寒のために有情は苦しきの

あまり聲を擧げる、その聲によつて名を立てたのである。

此の外孤地獄なるものがある。各別業の招くところ其の數其の場處共に一定しない。或は江河山邊曠野等に散在して居る。或は空中地下等にもある。地獄の壽量の長さは、まづ人間の五十年を欲界六天の最下の天なる四王天の一晝夜とし、その四王天の五百歳を等活地獄の一晝夜として、壽五百歳次に人間の百年を第二天の一晝夜として、その天の一千歳を黑繩地獄の一晝夜として、其の壽一千歳、又人間の二百年を第三天の一晝夜とし、その天の二千歳を衆合地獄の一晝夜として、その壽二千歳、又人間の四百年を第四天の一晝夜とし、その天の四千歳を號叫地獄の一晝夜として、その壽四千歳、又人間の八百年を第五天の一晝夜とし、その天の八千歳を大叫地獄の一晝夜として、其の壽八千歳、又人間の一千六百年を第六他化天の一晝夜とし、その天の一萬六千歳を炎熱地獄の一晝夜として、その壽一萬六千歳、大熱地獄の壽量は半中劫無間地獄は一中劫である。

寒地獄では喩を以て壽量が出してある。佉梨と云ふ升目の量が摩揭陀國の一麻婆訶と云ふ升目の量になる。その升に苜蓿と云ふ穀物を入れて、其の中に平たく満たし而して百年ごとに一粒を除いて盡ることあるも須部陀の壽量は尙これより多いと云ふ。かくしてこの二十倍を次の寒地獄尼刺浮陀の壽量とし、次々に二十倍して最後の摩訶鉢特摩までの壽量を定めるのである。

さてこれらの壽量も中途で死ぬことがあるとなつて居る。中天の無いのは北俱盧洲や都史多天の一生所繫の菩薩等であつて何れの處も三界は中天を免れぬと云ふ。

以上印度傳來の經典に顯はれたる地獄を叙べ了つた。次には日本の民間信仰の上に如何にこれが影響して居るかを考へて見やう。

註(一) 無間地獄の「無間」と云ふ語義は、現今のサンスクリットには無い。「アギーチ」と云ふのが原語で、阿鼻至と對譯して居るが、この中「ア」は無なること論はない。「ギーチ」とは「波」と云ふ義である。然し又書物等の章段のことを「ギーチ」と云ふ。蓋し書物の一章一節を波浪の一起一伏に譬へて命名したものであらう。されば「アギーチ」は章段無しのことと、俗に云

ふ「のべつ幕無し」であるから、自然「無間」と云ふ譯も出来るであらう。又前の地藏本願經の中の無間の語義を見よ。

註(二) 「如炬吒蟲」は「如炬吒蟲」の方が正しい。これは「ヌヤクマ」と云ふ梵音を寫したものを意味が似て居るから「蠟」を「蠟」を誤つて傳寫したものであらう。

第三編 民間の信仰に現はれたる地獄

第一章 往生要義

様々の經典論疏の上に顯はれた地獄其の源を印度に發してそれが支那に傳譯せられ此に幾代の民心を支配し來つて遂に日本に傳はり上は萬乘の至尊より下は填生の小屋の老幼男女まであらゆる階級を擧つてこの思想の影響を受け來つた千有餘年間の歴史の跡を辿り行けば其の傳播分布の廣く且つ遠きに驚嘆せざるを得ないのである。

日本民族は當初から立派に地獄の思想を有して居たに違ひない。古事記などの舊い傳説に、「ヨモツクニ」「根の國」「ヨミ」などのことが見えて居るのを見ても知れる。然しながらその状態は一向詳でない。又隨つてその思想が何處から輸入せられたのか將た單獨に發達したのかを跡づけることも出来ない。

であるから地獄の思想が十分に顯はれて來たのはやはり佛教傳來の以後であるとせねばならぬ。佛教傳來以後と云つても始めの間は、三論法相の學派宗教が盛んであつて、これら學問的の宗派が勢力を得て居た奈良朝時代は、未だ地獄の思想などが十分顯はれるに至らなかつた。日本民族が佛教の地獄と云ふ思想に十分感染し、これを我が物としたのは、どうも平安朝中葉から末期にかけての時代であると云はねばならぬ。而してこれには、源信和尚の往生要義が與つて大に力あつたことを看過することが出来ない。往生要義のことは總論の中に一寸述べて置いたが、固よりこれは地獄の有様を叙べる爲めに作られたもので無い。只往生極樂の要義は念佛であると云ふことを諸經論に亘つて要文を抄集して明かにすると云ふのが主要の目的である。然るにその中の十箇章段と分れる中に、最初の厭離穢土の一段に於て迷ひの世界は此の如く厭はしく悟りの境界は此の如く美はしく望ましいと三界六道の有様を詳説してある。其中の「自ら地獄の苦相が説かれ而もそれが卷頭第一にあつて目に觸れ易いと

民間の信仰に現はれたる地獄

ころから王朝時代の人々の間に強く深く印象を與へたのであらう。これが續いて現今に至るまでも往生要集としいへば、さもか地獄の説明をしたものかのやうに、一般の俗衆には思はれるやうになつたのである。とは云へ全く往生要集の厭離穢土の卷に顯はれた地獄の叙述は實に巧妙を極めて居る。もとく源信和尚は能文の人である。この能文の人が一たび感興にまかせて筆を遣り厭離欣求の切なる情緒を述べ去り述べ來り地獄の苦相の恐ろしさ、洞然猛火の凄じさを寫し出すや、筆端風生じ雲起り人をして覺えず戰慄せしめすんば止まないものである。叙述は多くかの最も詳細を極めて居る正法念處經のそれを本とし、まゝ觀佛三昧經を引き、其間には瑜伽論、智度論等の論部を錯綜して居る。かの廣漠たる正法念處經の叙述を僅かに十數紙の間に縮寫して、取捨その宜しきに契ひ、繁簡その當を得たる書き方は實にこれ從來の經典論疏に顯はれたる地獄全景の縮圖と云ふべきである。曩に予は俱舍論世間品の叙述を以て印度に於ける世界觀の撮要となし、隨つてその一部分である地獄の叙述は印度に於

ける諸經典の地獄の叙述を集めて大成したものであらうと斷定した。而して今や數世紀の間印度支那を風靡し來つた地獄の思想は、此に往生要集の卷頭に於て、僅かに十數紙の間に縮寫せられた。此の簡単な縮圖こそは從來のあらゆる經典論疏を集めて大成したものであると斷定して差支はあるまい。予は正法念處經を始めとして種々の經典に顯はれた地獄の有様に關して已に叙べ終つたのであるから、今此に往生要集の地獄の有様を叙べるのは、前來のことを反復することになるから略することゝする。然し平安末期の民族精神に向つて、この驚くべき巧妙な縮圖を提供し、王朝時代の大宮人の胸の裡に、印度以來幾百年間培はれ養はれ來つた大思想を植付けられた源信和尚の功績に對して、大聲疾呼せざるを得ない。何となれば、この思想が根柢となつて、厭離穢土の思想となり、これがやがて來るべき鎌倉室町時代の宗教的革新運動となつて起つたのである。源信和尚の往生要集は實に當時の人心に對して驚くべき影響を及ぼした。然し源信和尚は單に文字に依つてのみ人心を動かしたのでは

無かつた。多藝多能の和尚は得意の繪畫彫刻に於ても幾多の傑作を後昆に貽して居る。而してこれら藝術の中心には勿論いつも厭離穢土の思想が動いて居るのである。傳ふるところに依れば圓融帝の皇后は和尚に對して、「往生要集の勸説至れり盡せり」とは云へ、思かなる童幼婦女はその旨趣を知りわくることが出来すまい。願はくば貴僧これを繪圖として書きあらはし給はれ其の利益ひとしは廣大であらう」とは云れた。和尚もこの旨を了承して禪定に入ること一七日面たり十界の有様を觀て逐一にこれを圖畫し更に其の上方に往生要集の文を賛して宮中に上つた。皇后大に悦びたまひこれを花山の帝の敎覽に供へ、そのまゝ宮中に掛けて置かれたところが夜靜かに萬籟聲なき折ふしは閻魔王の呵責の聲雷轟の如く響き獄卒の叱咤の聲罪人の號泣悲鳴の聲手に取る如く聞えて宮女恐れを懐き眠ることが出来ぬと云ふので遂に繪圖は和尚の許へ還された。現に今江州坂本の來迎寺に藏する十界の圖はこれであると云ふ。丹青の妙技眞に通つて氣の弱い宮中の女官達に幻視幻覺を起さし

めたとすれば實にさもあるべき事と首肯される。曾てダンテは神曲の中に地獄を描き鬼氣悽愴人をして酸鼻に堪へざらしめ、その結果當時の人々をしてダンテが街を逍遙して居るのを認めては、「あゝ彼處に地獄に在りし人が行く」と云ふに至らしめたと云ふ傳説と好箇一對のものでは無からうか。

第二章 十王經

第一節 支那に傳へられたる十王經

さて往生要集によつて植付けられた地獄の思想は其の後民間に於て非常に變遷し大なる發達を遂げた。即ち印度傳來の經典に現はれた地獄を背景としてこれに幾多の著色と種々なる道具立を加へて經典の上には全く典據の無い地獄が傳へられるやうになり而もそれが深く且つ強い印象を一般民衆の上に及ぼして居るのである。以下此の民間の信仰に現はれた地獄に就て叙べて見やうと思ふのである。

佛敎の經典の上に更に典據の無い地獄の思想として、數へ舉ぐべき第一は十王の思想である。十王とは人の死後罪を審判する十冥官であつて、これは明かに支那に於ける道教の思想が佛敎と混じて成立したものである。其の起原に至つては、唐の代に道明和尚と云ふものが冥途へ行つて十王が亡者を治めて居るのを見て來て、世の中へ傳へたと云ふやうな傳説がある。宋の代になつて成都府大聖慈寺の沙門藏川と云ふものが預修十王生七經なるものを世の中に弘めた。

これが抑も支那で十王の思想も盛んになる起原であつた。日本でもこの十王生七經が鎌倉時代の初期に已に渡つてゐて、深く民間に傳播して居つたらしい。然しながら、日本では其の後、地藏十王經の流布のために十王生七經は全く其の影を潜めてしまつた。地藏十王經は全く日本で出來た經典であつて支那で流傳した形跡が無い。

要するに十王經には、支那で出來たのと、日本で出來たのとの二種がある。其

に「佛説」この二字を添えてはあるが、印度傳來の經典で無いことは明かである一體十王の思想は、支那に於て道教の思想が佛敎の中へ混入した一例であつて印度では更に見ることの出來ない思想である。其の起原に至つては、確としたところは分らないが、已に唐の時代に道明和尚なるものが冥途へ行つて、十王が亡者を裁判してゐる有様を見て來て、世に弘めたと云ふ傳説が佛祖統記に見えてある。想ふに、此の頃から十王の思想が佛敎の中に這入り込むやうになつたものらしい。随つてこれが民間の傳説となつて、死後には必ず十王の審判を受けねばならぬと云ふやうに信じられるやうになつたのであらう。冥界の審判者は印度では閻魔王に限られて居つたのが、支那に來て道教の影響のために十王となつた。これらの傳説を證據立て、居るものが、支那で出來た十王經なのである。

十王經、具さには佛説預修十王生七經と云ふのである。これは宋の代に成都府大聖慈寺の沙門藏川なるものが、佛説閻羅王授記四衆逆修生七往生淨土經な

民間の信仰に現はれたる地獄

る經典に七言四句の讚頌三十三首を挾んで世に弘めたものであることは經の内題によつて知ることが出来る。然しこの佛說闍羅王授記四衆逆修生七往生淨土經と云ふ經典は何時ごろ出來たものであるか誰が作つたものであるか明かでない。これも確かに印度傳來のものでは無く誰か支那の人が製作したものに違ひない。或は藏川其の人が製作したかもしれぬ。ともかく藏川は十王經の作者であるか作者ならずとしても弘通者として知られて居るのである。今この經典の梗概を述べるならば次の如くである。

佛かつて鳩尸那城の阿維跋提河の邊り娑羅雙樹の間に於て將に涅槃に入らんとし給ふ時大光明を放つて大衆を照し給へば天龍鬼神闍羅天子大山府君司命司録五道の大神地獄の官典悉く來集した時に佛は闍羅天子に對つて未來世必ず成佛して普賢王如來となり華嚴と名くる國土に住するであらうとの記別を與へられる。すると阿難が問を起して闍羅天子は何の因縁を以て冥途を支配し又今此に佛の記別を受くるに至つたのは如何なる次第であるかを尋ね

る。これに對して佛の説かれるやう。二つの因縁がある。一には不思議解脱不動地の菩薩が極苦の衆生を化益せんためにかの瑛魔等の王と化現して居るのである。二には戒律を犯した爲めに瑛魔天から墮落して大魔王となり多くの鬼神を統御して閻浮提の中一切の罪人を審判するやうになつたのである。然るに今しも因縁已に熟して成佛の期が到つたのである。

それで若しこの經を受持し讀誦するならば捨命の後三途に生ぜず諸地獄に入らずたとひ在生の日に父を殺し母を害し齋戒を破り一切の重罪を作つて地獄に入つても此の經を造り諸尊の像を書くなれば其の功德を喜んで閻魔王は其罪を許して富貴の家に生れしむる。

若し善男善女生七齋を預修する時は毎月二時三寶を供養し十王を祈る。此の功德が天曹地府の官に聞えて死後樂い處へ生を得べく中陰の四十九日を持たず十王の處に止めらるゝ心配が無い。若し一齋戒を闕く時は必ず其王の所に留まつて苦を受けねばならぬ。されば必ず預修の生七齋をなすべきである。

その時地藏菩薩等の菩薩は、佛足を頂禮して、同聲に世尊を讚嘆し、閻羅天子六道の冥官も共に禮拜して、「衆生若しこの經を造り、一偈をも讀誦するものは必ず地獄を免れしめて天道に生せしめん」と發願した。

終りに閻羅法王は佛に對して、「世尊我等諸王はみな使を發して、黒馬に乗り黒幡を把り、黒衣を着て、亡人の家を検べ、何の功德を造つたかを見て、それ〴〵札に記して、善惡を裁判し、誓願と相違すまじ」と白した。

此處までは經文と讚頌と交る〴〵出て居つて、經文の説を讚頌で繰り返すやうになつて居るが、この次からは、讚頌ばかりであつて相當すべき經文が見えない。而して十王の名を擧げて、其の下に讚頌が出してある。即ち次の如くである。

第一七日過秦廣王

一七亡人中陰身 驅將墜墮數如塵
且向初王齊檢點 由來未渡奈河津

「一七の亡人中陰の身、驅り將て墜墮する數塵の如し、且らく初王に向つて齊く點檢せらる、由來未だ奈河の津を渡らず」

第二七日過初江王

二七亡人渡奈河 千群萬隊涉江波
引路牛頭肩挾棒 催行鬼卒手擎叉

「二七の亡人奈河を渡る、千群萬隊江波を渡る、引路の牛頭は肩に棒を挾み、催行の鬼卒は手に叉を擎ぐ」

第三七日過宋帝王

亡人三七轉恹惶 始覺冥途險路長
各々點名知所在 群々驅送五官王

「亡人三七轉た恹惶、始めて覺ゆ冥途險路の長きを、各々點名して所在を知り、群々驅送す五官の王」

第四七日過五官王

五官業秤向空懸 左右雙童業簿全
輕重豈由情所願 低昂自任昔因緣

「五官の業秤空に向つて懸る、左右の雙童業簿全し、輕重豈情の願ふ所に由らんや、低昂自昔の因緣に任す」

第五七日過閻羅王

五七閻王息諍聲 罪人心恨未甘情
策髮仰頭看業鏡 始知先世事分明

「五七閻王息諍の聲、罪人の心恨みて未だ甘情ならず、髮を策み頭を仰むりて業鏡を看せしむ、始めて知る先世の事分明なるを」

亡人六七滯冥途 切迫坐人執意愚
日日只看功德力 天堂地獄在須臾

第七七日過大山王

七七冥途中陰身 專求父母會情親
福業此時仍未定 更看男女造何因

第八百日過平等王

亡人百日更恓惶 身遭枷械被鞭傷
男女努力造功德 從慈妙善見天堂

第九一年過都市王

一年過此轉苦辛 男女修齋福業因
六道輪廻仍未定 造經造佛出迷津

第十至三年過五道轉輪王

後三所歷是開津 好惡唯憑福業因

「亡人六七冥途に滯る、切迫せらるる、坐人執意愚なり、日々只看る功德の力、天堂地獄須臾に在り」

「七七冥途中陰の身、専ら父母を求めて會情親し、福業此時仍未だ定まらず、更に男女何の因を造るかな看る」

「亡人百日更に恓惶、身は枷械に遭ひ鞭傷せらる、男女努力して功德を造れば、慈妙善より天堂を見ん」

「一年此を過ぎて轉た苦辛、男女修齋福業の因、六道輪廻仍未だ定まらず、經を造り佛を造りて迷津を出づ」

「後三の歷る所是れ開津、好惡は唯福業の因による、

不善尙憂千日內 胎生產死天亡身

不善尙憂千日の内、胎生產死天亡の身

以上は其の梗概に過ぎないが、經典もさまで長いものでは無い、僅かに十三紙の短いものである。然しこの中に、ともかく明かに十王の名が出て居り、從來の印度の傳説と全く方面を異にした説明が見えて居るのを注意せねばならぬ。閻羅天子が天界を墜落して地獄の大魔王となつたとの説は、恰度吠陀時代のヤマ、ヤミの雙神から死者の世界の王が出来た傳説を想起せしむるもので、夜摩天と閻魔とを連絡せしむるところが、俗説ながら興味が深い、閻魔王が晝夜六時に苦を受けると云ふ傳説と併せて見るも面白いし、ミルトンの失樂園に出てゐる大魔王をさながらに見るやうにもある。又十王に七日七日の忌日を配當する思想は、前に出して置いた地藏本願經に仄見えてゐる四十九日の思想と密接な關係があると思はれる。さればこそ、この十王經が後に形を變へて地藏菩薩を主としたものとなり日本の民間に傳へらるゝやうになるのである。このことは次の日本に傳へられたる十王經の下で述べよう。

何しろこの十王經が傳へられて、宋末元初の頃の支那には人が死ねば必ず十王供を修して冥福を祈ると云ふ風習があつたと云ふことである。元明の代を過ぎて清朝になつては、全く道教と融合してしまつた。かくて十王は天帝の臣となり、又一方には八大地獄を支配して居ると稱せられて居る。

註一 十王のこゝに關しては山田文昭氏の研究に負ふところ極めて多い、謹んで謝意を表す。

註二 地獄變相の圖は支那に於て已に吳道子など、云ふ佛畫工が畫き出したと傳へられ、それから多少の發達をしたであらうが其の發達の迹を知ることは難い。而も日本に於て、平安末期の頃、已にかゝる繪畫のあつたと云ふことは、非常

に注目すべきものである。

註三 世傳、唐、道明和上神遊地府見十王分治亡人因傳名世問(佛祖統記)

第二節 日本に傳へられたる十王經

十王經に、支那所傳のもの、日本所傳のものとの二種あることは前に叙べたが、この中支那所傳のものは、如何いふものかあまり弘く傳はらずに散佚してし

まつて、現今では寧ろ珍本の部類に屬して居る。然し日本所傳の十王經は比較的得易いのみならず、註釋講義の如きも二三種以上はあり、殊に存覺上人の淨土見聞集の一部分はこの經典に依つて作られてあるところから、時には眞宗の説教などにも使用せられて居る。想ふに幾多の信者は、いかに死出の山三途の川の恐ろしさに戰慄し、淨玻璃の業鏡に、自分の罪の姿を耻ぢたであらう。かくてこの經典は日本の民間に傳へられた地獄の信仰の根柢となつたのである。かの往生要集に出でゐる正法念處經や觀佛三昧經が、りの地獄思想も無論其の一部分にはなつて居やうが、決してそれが全體では無い。即ち平安朝前後の民心はこれで支配されたであらうが、鎌倉室町の時代に降つては、民族精神を支配した地獄の思想は、恐らく此の十王經であつたに違ひない。して見れば此の十王經こそは、實に少くとも六七百年若くば一千年近い民族精神の背景となつて、日本の佛教界に影響を及ぼした經典である。云はねばならぬ。然し此の經典が何時頃製作せられたかは疑問であつて、自然此の經典の權威に就ても、疑ふ

民間の信仰に現はれたる地獄

べき餘地が少くは無いが、たゞこの經典を極めて後代の製作であると定めても、その製作せらるゝには必ずや其の時代若くは其の時代に至るまでの民族精神を取り入れたに違ひない。だからこの經典を民族精神の結晶と見て、此の經典の中にある地獄の思想を、全く時代民心の反映と解釋するに何の差支があらうか。随つて日本民間の地獄の思想が、何であるかを看取せんとするには、この經典を措いて外に求むべきものは無いのである。この意味から予はこの經典を稍精細に見て行きたいと思ふ。

日本の十王經も、支那の十王經の如く、成都府大聖慈恩寺沙門藏川なるものが作つたことになつて居る。跋文とも云ふべき處には、「右の本末記に曰く、嚴佛調三藏の云く、此の經の梵本は、多羅の文に非ず。三昧の内に、眞佛示現して、此の經の梵文を授く。三昧より起ち、先づ竹帛に書して、然る後に修習す。北天竺より支那國に到り、大聖文殊は照耀殿に於て、爲めに流通を許す。時に天聖七年十一月なり。小葱菟原孚普く衆信の縁を化し、廣く消罪の路を開き、因つて以て梓

に入れ、永く爲めに流通す。」(略)と見えて居る。これは現今傳はつてゐる支那の十王經に見えて居ない文だが、これ明かに支那の十王經の來歴を記したものである。恐らく現行の支那十王經は、この跋文を脱落したのであらう。

さて日本の十王經の本文を検し來るに、これ明かに支那の十王經から案出したもの、否寧ろ、それを基礎として、附け加へたものである。それは最初の説き起しの文面が似てゐるのみでなく、支那の十王經に挿はさんである七言四句の讚頌を、其の儘に用ひたところから見ても明かである。而して全卷の文勢は著しく和文の傾向を帯び、「別都頓宜壽」と云ひ「預彌國」と云ふが如き、明かに「はとゞぎす」「よみの國」を表はしたものであつて、恁んな和語を挿入して居るところから見ても、又支那に於て流布の痕跡なきに徴するも、日本人の誰か、作つたものなることは明かである。況んや眞の支那に傳へられた十王經が存在する以上、兩者を比較し來れば、容易にその附加の跡を見ることが出来るに於て、や。最早今日この經典は日本に作られたものだといふことに疑ひの餘地は無

いのである。
 さて然らば如何なるものがこの經典の材料となつたのであらうか。基礎は前に述べた如く支那の十王經である。而してこれに加ふるに諸種の口碑傳説を以てしたものは違ひない。即ち民間に行はれた諸種の信仰を取り入れたものであらうから明瞭にこれと云ふ典據を指示することは出来難いが確かに地藏本願經の如きは其の材料の一つであらうと思はれる。即ち此の經典の後半は地藏菩薩の因位發願の物語を記載して居るがその文面が地藏本願經其儘である。地藏本願經を讀んだ後に此の經典に對する時何人もこの事を否定することは出来ないであらう。一體四十九日の中陰のことが已に地藏本願經の上に其の萌芽を見せて居る。恰ど又地藏尊は六道能化の菩薩として地獄の苦患を救ふと云ふ信仰が一般民衆の上に強く根を張つて居た。此に於て地藏尊が此の經に於て閻魔王宮の善名稱院に入定して居られるとの説を生じて來たのである。此の經の内題には佛説地藏菩薩發心因緣十王經とある。故に

學者は此の經典を便宜上地藏十王經と稱して一方の支那の十王生七經と區別して居る。今此の經典の梗概を叙べるならば次の如くである。
 佛かつて鳩戸那城の跋提河の邊り入涅槃の處にゐまして、諸の聲聞は前後に圍繞し、無量の菩薩は皆集り、人天五十二類もみな雲の如く相會した。時しも涅槃經前分の後遺教經の前である。その時大光明を放ちて閻魔の國を照したまへば閻魔王、十大王、衆獄司、候官、司令神、司録神、閻魔使者、羅刹婆、無量の異類、無數の鬼神、部類、從屬、忽然として地より涌出し、世尊を恭敬供養し、掌を合せて佛に向ふ。その時世尊光明を收めて閻魔法王に向ひ、「娑婆國の衆生は罪障深くして、みな地獄に墮ち、極中の極苦を受ける。今われ略してこれを説くであらう」と宣べ、閻魔法王大に歡喜して世尊を讚嘆し。世尊は此に説を起して此の經典の説法が始まるのである。始めに三魂七魄のことを述べる。即ち次の如くである。

- (一) 胎光業魂神識
- (二) 幽精轉魂神識
- (三) 相續現魂神識
- 阿頼耶識

- (一) 雀陰魄神識
 - (二) 天賊魄神識
 - (三) 非毒魄神識
 - (四) 尸垢魄神識
 - (五) 臭肺魄神識
 - (六) 除穢魄神識
 - (七) 伏尸魄神識
- 七魄

まづ一切の衆生臨終の時になれば閻魔法王は閻魔卒を遣はして三魂を縛り來らしむ。即ち奪魂鬼と奪精鬼と奪魄鬼の三卒である。かくて三魂を縛して門關樹と云ふ樹の下へ召し連れて來る。此の樹は正しく冥途の入口にあつて、荆棘を有して居る。その鋭きこと鋒刃のやうである。その樹の上には二つの鳥が栖んで樹を掌つて居る。即ち無常鳥と拔目鳥とである。一鳥罪人に向つ

て「我れ汝が舊里に於て監縛となり、怪語を示して別都頓宜壽と鳴いたのであるが、汝は知つて居るか」。又一鳥罪人に向つて、「我れ汝が舊里に於て、鳥鳥となり、怪語を示して、阿和薩加と鳴いたのであるが、汝は知つて居るか」。罪人は「知らぬ」と云ふと其の時この二つの怪鳥大に怒つて、「人間に在りし日の罪業を懲さん」と云ひ、腦漿を歡り、眼球を抜き取る。罪人もし谷重ければ兩樹相逼つて、膚を割り骨を挫き、髓を漏らすのである。谷なければこの事がない。さてこれからが死天山の南門になる。死天山には罪人險阪に杖を尋ね、路傍の欵つ石には鞋があらばと願ふのである。死人に三尺の杖を添へ、その杖には地藏尊の像や隨求陀羅尼を書きしるし、又鞋一具を供へるのはこの理由である。さうすれば罪人通行すること大穴を通るやうに容易である。これらは日本の風俗習慣に一致してゐるところで、此の經典の作られた時代と場所を暗示して居る。死天冥途の間は五百史緯那である。

淨土見聞集にはこの下を、「はじめて罪門關樹のもとにありて、かなしみの涙

民間の信仰に現はれたる地獄

を中有のちまたに流す(略)しかうして後暴風吹ききたりて關樹の葉を吹き落すに、ことごとく劍となりて身を貫ぬく、その葉こがしはの如し。劍の身に立つ多少によりて業の淺深を知る。その後死出の嶮山をこえて奈河の幽岸にいたると述べてある。

此の文を誦し來る時吾人はダンテの「神曲」地獄篇の第三段の章句を想起せざるを得ない。ダンテは黄泉の門を入りて、アケロンテの物凄き岸に亡者の集り來る光景、渡守カロンテの恐ろしき聲音を叙べて次の如く云つてゐる。

「秋に、木の葉の吹かれて落つるや、

一葉また一葉と、つぎつぎに、

枝はその衣をすべて地に委するごとく、

「あだかもまた罪人なる、アダモの裔は、

一人また一人と、つぎつぎに、岸の上より、

合圖と共に呼び返される鷹の如く身を投ぐるよ。」

これを次の讃頌と比較すれば黄泉の叙述東西自ら其の揆を一にするものあるを感ぜざるを得ない。其の文は次の如くである。

「秦廣王亡人に告て言はく「哀れなるかな苦なるかな」。頌に曰く。

汝去りて死山を過ぎ、漸く閻魔王に近づく、

山路に衣食なし、飢寒の苦何んが忍ばん。

「その時天尊偈を説いて言はく、

一七の亡人中陰の身驅られて將に墜墮せんとす、數塵の如し。

且らく初王に向つて齊しく點檢せらる、由來未だ奈河の津を渡らず、

(此一頌、十王生七經に出づ)

亡人を召して門關に坐す、死天の山門に鬼神を集め、

殺生の類先づ推問す、鐵杖體を打ちて通申しがたし。」

第二七日には初江王の宮殿に到り着くことになる。すると其の前路に葬頭河と云ふ川がある。その川の渡場を奈河津と云ふ。渡るべき場所が三箇處に

民間の信仰に現はれたる地獄

なつてゐて、一を山水瀨二を江深淵三を有橋渡と云ふ。初江王の官廳の前に衣領樹と云ふ大樹が聳え立つてゐる。その樹蔭には奪衣婆と懸衣翁の二鬼が居る。種々に罪人を苦しめ奪衣婆は罪人の衣服を脱がせて懸衣翁に渡せば翁はこれを受けて衣領樹の枝に懸ける。罪の輕重に隨つて樹の枝は或は高く或は低くなる。あはれ罪人は僅かに一着の經かたびらも此の葬頭河の老婆に奪ひ去られ行く手心細くもたざり行くのである。偈に云ふ、

「二七亡人奈河を渡る、千群萬隊江波を渉る。」

引路の牛頭は肩に棒を挟み、催行の馬頭は腰に叉を撃ぐ。「此一頭、十王生七經に同じ」牛を苦しめ牛を食らへば牛頭來り馬に乗り馬を苦しむれば馬頭多し。

衣無くして寒苦自身に逼る翁鬼は悪眼にして利牙を出せり。」

淨土見聞集には「二七日のどまり初江王の廳につく。すなはち脱衣鬼をめてして罪人の衣をぬがしめて衣領樹にかく。枝の低昂にしたがひて罪の輕重を定む。もし慚愧の衣を着ざれば身の皮を剝がる。苦忍ふべからず」とある

「黄泉の岸より率て奈河の津をおとし、喪塗河を渡す。引路の牛頭は鐵棒をもて路を教へ、催行の馬頭は鐵叉をもて流れを示す」とあるのはこれに相當する然しこの後の一節は三七日宋帝王の下になつてゐる。淨土見聞集は現行の十王經と一致せぬところ此の他に少くない。蓋し十王經にも種々異本が有つたものと見える。

第三七日には宋帝王その官廳の前には惡猫群がり集まり、大蛇並び出で罪人の乳房を破り、身體に纏ひつきて罪人を苦しめる。時に閻魔の獄卒は罪人を呵つて、「我等無慈悲にして汝を苦しむるのでない。全くこれ汝が邪淫の業から招いたのである。この苦も後の苦に比べては物の數にも足らぬのである」と云ふ。偈に云ふ、

「三七には亡人轉た恓惶始めて冥途の險路の長きを覺る。」

各名を點じ所在を知る、群々駈て送る五官王。」(此一頭、十王生七經に同じ) 第四七日には五官王宮殿の左右に秤量舎と勘録舎の二つの建物がある。秤

量舎は左に構へて高臺の上に七個の秤量を並べ罪人の業の輕重を量り、これを右方に構へてある勘録舎に傳へると、赤紫の衣を着た冥官達が、詳に帳簿に記して閻魔王の宮殿に送るのである。偈に云ふ、

「五官の業の秤空に向つて懸る。左右の雙童業簿全ふし。」

輕重豈情の所願に由んや、低昂自ら昔の因縁に任す。」此一項、十王生七經と同じ

雙童子形焚の偈に云ふ、

「證明善童子、時として離れざること影の如し。耳を低れて善を修するを聞き、

微善をも記せずと云ふことなし。證明惡童子、響と聲の體に應ずるが如し。目を留めて造惡を見、小惡をも録せずと云ふことなし。」

淨土見聞集に「四七日には五官王空には業量のはかりをかけて、罪の輕重を

正し、地には雙童の札にまかせて業の多少をしるす」とあるは實に簡にして盡

して居る。

第五七日の閻魔王はこの經典の最も主要な部分になつて居て、記事も亦最も

長い。

閻魔王の國は人間の地を去ること五百里、緝那であつて、「無佛世界」と云ひ、或は「預彌の國」とも云ふ。大城の四面は鐵牆を以て圍まれ、四方に鐵門を開いて居る。閻魔王の左右には檀茶幢と云ふものがある。大きい柱のやうな形で上に人頭の形が載せてある。右を黒闇天女幢、左を太山府君幢と云ひ、善く娑婆世界の人間を見ること掌中の果を見るが如くである。

凡そ一切衆生には同生神なる神があつて、左右に附き隨つて居る。この二神は雙童とも名けて影の形に添ふ如く、人間の左右を離れない。左神は惡を記し、右神は善を記して閻魔王に奏聞する。王は亦かの左右二童の見る所を聞き、これによつて善惡を判斷して、秋毫も誤ることは無い。

閻魔王の宮殿は光明王院と善名稱院との二つが分れて居る。光明王院の中心には大鏡臺があつて、淨頗梨鏡が懸けてある。この淨頗梨鏡は閻魔王昔日無遮の因によりて感得したものであつて、一たびこの鏡に向へば三世の諸法情非

民間の信仰に現はれたる地獄

情の事皆悉く明かに映じて居る。又この鏡の八方には業鏡が懸けてある。即ち一切衆生の共業増上の鏡である。罪人はこの業鏡に向つて前生の所作の現はれるのに驚き、自分の罪業を悔ひ歎くのである。淨土見聞集に「つたへ聞く閻魔王は鏡を塵の小罪にかけて知り、俱生神は筆を露の輕罪に染めてしるす」と云ひ又、「五七日のあしたより閻魔王のせめをかうふる。頭をつかみて面を玻璃の業鏡にむかふ」とあるはこれである。

此處に閻魔王は大衆に對つて十齋日のこと、其の十齋日に當つて、供具を備へて神呪を唱ふれば横死を免れて壽命を延すことが出来ることを審しく説いて居る。偈に云ふ、

「五七には亡人息諍の聲、罪人心恨みて未だ甘情ならず。

髮を策み頭を仰がしめて業鏡を見せしむ。悉く先世の事を知ること分明

なり。」此一頌、十王生七經と略は同じ。

善名稱院は地藏菩薩の入定の處であつて、結構美麗を極めた淨土である。金

沙を地に布き、寶玉を道に疊み、樹は七珍を分ち、枝には妙華を開いて居る。華菓長へに結んで春秋を續いて落ちない。池には七寶の蓮華、青黃赤白に咲き亂れ、汀には六種の鳥五音を暢べて居る。此に能化の導師、地藏菩薩は四大菩薩に繞まれて中央に在し、毎日晨朝に恒沙定に入りたまひ、定より起ちて十方の國土に行化をなし、有情屋宅の門戸に立ちたまふ。淨心に念するものあれば兩手を開いて懨懨として微笑みたまひ、不淨を行するを聞いては、左の中指を以て胸の上を針さして、悲泣して去りたまふ。行化すること日々に怠りなく、地獄に入りては苦を離れしめたまふ。

此の下に地藏菩薩の因位發願の物語を記載してゐるが、地藏本願經と比較すると大に似たところがある。而してこれらの説は全く何人かによつて附加せられたものであつて、支那所傳の十王經の上には少しも見えてゐないものである。殊に此の下に六地藏の名稱が見えて居るのも注意すべきものであらう。即ち有縁の衆生に六種の名字を以て化益を施さんと云ひ、其の六種の名字を釋

尊は偈を以て述べて居られる。

「預天賀地藏左には如意珠を持ち右手は說法印なり、諸の天人衆を利す。」

「放光王地藏左手は錫杖を持って右手は與願の印なり、雨を雨らして五穀を成す。」

「金剛幢地藏左には金剛幢を持ち、右手は施無畏なり、修羅を化して幡を靡かす。」

「金剛悲地藏左手は錫杖を持ち、右手は引攝の印なり、傍生の諸界を利す。」

「金剛寶地藏左手に寶珠を持ち、右手は甘露印なり、俄鬼に施して飽滿せしむ。」

「金剛願地藏左に閻魔幢を持ち、右手は成辨印なり、地獄に入りて生を救ふ。」

かくの如くして六道能化の導師なる地藏菩薩が普く苦惱の衆生を救ひたまふとの傳説は民間あらゆる人々の胸に深く刻まれたのである。わびしき漁村のはて、いふせき荒野のほとり、三昧堂、卵塔婆などの傍らには、軒の傾き、柱のゆがんだ小堂が建てられて、その中に寂しく立たせたまふ六體地藏の尊像は今もなほ見ることが出来る。此處に幾多の老幼は歸らぬ人を見送りて、涙の袖をしぼりつゝ、如何にこの尊像の前に幸なき人の上安かれど、心からの願ひを捧げたこ

とであらう。吾人は民族信仰の背景となつて來たこの十王經の權威の大なるを思はずには居られないのである。

第六七日の變成王第七七日の太山王、第一百日の平等王、第一年の都市王、第三年の五道轉輪王の下には別に取り立て、云ふ程のことは記されて居ない。只前の十王生七經の頌を其のまゝ出して、僅かに一二行説明を附け加へて居るに過ぎない。蓋し十王經は第五の閻魔王に於て其の頂點に達したものと云ふべきであつて、殊に地藏十王經に於ては地藏菩薩のことを既に説き了つた以上は最早すべて終極を告げたのである。世尊は最後に大衆の問に答へて佛性常住の理を述べ、「諸行無常是生滅法、生滅々已寂滅爲樂」の偈を説いて三熱の大苦惱を離れしめ、大衆大に歡喜して閻魔王國に還つたと云ふところで十王經は終つて居る。

注(一) 同生神、雙童の説は印度に於ても古くから行はれてゐたものと見て、俱生神即ちサハシャ、デーヴなる名稱は已に華嚴經入法界品に見えて居る。曰く、

民間の信仰に現はれたる地獄

「世人初始生時、則有三天、同時而生、一日同生、一日同名、彼天與人恒相隨逐、天常見人、人不見天。」

註(二) 正月五月九月の三月に、十日を選んで齋戒をなす。即ち次の如き割當に佛菩薩を念ずるのである。

一日 定光佛 八日 藥師 十四日 賢劫千佛 十五日 阿彌陀 十八日 觀音
廿三日 勢至 廿四日 地藏 廿八日 大日 廿九日 藥王菩薩 三十日 釋迦

これらは十三佛など、いふ思想と何等か連絡があるやうに思はれる。十三佛は恐らく餘程後世のものであるらしい。十王の本地垂迹を定めたのが日蓮の作と傳ふる十王讚嘆鈔であつて、その本佛に三佛を加へたのが十三佛である。

註(三) 十王經の註釋にはこの日蓮の十王讚嘆鈔を始め、隆堯の十王本跡讚嘆善鈔二卷がある。又叶阿の科註地藏十王經六卷、了惠(或は意)の地藏十王經註解十三卷も見らるべきである。眞宗では淨土見聞集に其一部分が載せてあるけれど、これは寧ろ隨他意の説なること、卷末に「十王讚嘆なんごは……當流にはしかるべからざることなれども」その斷り書に見ても明かである。播州實藏寮司の十王經講義三卷(寫)も眞宗の立場から見られたものである。然し十王經を偽經にあらずとする如き稍々首肯し難い點もあるやうに見ゆる。

註(四) 支那に傳へられた十王經は、建仁寺の塔頭兩足院に藏する朝鮮刊本によつて影寫した大谷大學の藏本に依つたのである。

註(五) 支那の十王經は大聖慈寺となつてゐる日本の十王經には「大聖慈恩寺」と「恩」の一字が加へられてゐる。尙ほ前者にありては「藏川述」とあり、後者は「藏川弘通」とあるのが異なつた點である。

註(六) 天聖七年は、日本の後一條天皇長元二年にして、西暦一〇二九年に當る。

註(七) 死天山とは死を重ねるが故に死天と云ふことである。

註(八) 羅刹婆は羅刹婆の誤寫なり梵音ラークンヤサ(婆)と婆と字形の混同を見るは常の如くである。

第三章 特殊なる地獄

第一節 孤地獄

孤地獄なる名稱は、已に俱舍論の上に見えて居る。即ち八熱地獄だの、八寒地獄だのと云ふやうな列數の中へ、數へられてゐない特殊の地獄のことで山の間に野の末にも、地下にも、空中にも、到る處に存在して居ると云ふことになつて居る。これで見れば、已に佛教經典の上にも孤地獄と云ふ特殊な、而も様々の地獄を認めて居るのである。随つて所々に恣ういふ地獄が見られるのである。一例を擧げるならば前に述べた泥犁經の地獄の如き、又孟蘭盆經に目蓮の母親が苦を受けて居る地獄の如きはこれに屬する。然して民間の説話を辿つて行けば殊にこの部類に屬すべき地獄が澤山にあるのを注意せずには居られない。

民間の信仰に現はれたる地獄

日蓮上人の行蹟として傳へられて居る、鶉飼の勘作の苦しめられて居る地獄も一種の孤地獄なれば、産後の病氣で死ぬ婦人の苦しめられる血の池地獄だの子を産まぬ婦人の苦しめられると傳へられて居る石女地獄も亦孤地獄と云へよう。

血の池地獄は前に出した起世經の地獄の中の第六にある膿血地獄と云ふ地獄の變化した思想と見られないことも無いが、恐らくは偶然の一致であつて、兩者の間には何等思想上の影響はあるまいと思はれる。蓋し血の池地獄は婦人のみに限られた地獄として傳へられて居る。婦人は月に一度の經血を漏らす。古代にあつてはこれが神祇を穢す避くべからざる罪惡であると思はれて居た。汚れの品々が塵に交り火に燃えては、火神を穢し、淨き川に洗ひ流せば、水神を穢しかくて不淨の血は天地廣しと雖も、捨つるに地なく、積り積りて縦横八萬由旬の血の池となり、婦人と生れては、たとひ王侯長者の姫君も山賤士民の妻女までも、同じ地獄に集まつて、浮きつ沈みつ悲しみの聲をあげて、娑婆の親子の名

を呼ぶと傳へられて居る。尤も月經の如き生理的のものが罪惡と考へられたことは、今日から見れば寧ろ滑稽に見えるが、此の思想は古代にあつては東西を問はず何れの國でもあつた思想である。殊に婦人の劣等視せられた東洋では當然の考へであつたのである。

これと寧ろ反對な思想から成立したものが石女地獄である。婦人として子を産まぬものは、婦人たるの役目を爲し遂げないものとして此の地獄に送られる。阿房羅刹の惡鬼に逐はれて劍の山に登らせられ、一人の鬼は西へ行くと云ふかと思へば、一人の鬼は東へ行くと云ふ。あまりの苦しさに悶絶して倒れる。又もや鬼が前に現はれて、糸竹の藪へ追ひやられる。鬼は燈心を持たせて、竹の根を掘れ、「竹の根を掘れ」と責めさいなむのである。亂るゝ髪を竹の根に巻つけて引けごしやくれご根は掘れずに髪が抜け、血の涙を流して苦しむ。「娑婆にて二人になるならば、かゝる苦はなからうもの、たとひ糸竹の根を掘るにも我子と二人で掘るならばこの悲しみはあるまじ」と悔み歎くと傳へられて居る。

又淺間山のやうな箱根のやうな火山のある處温泉の湧く處には必ず地獄谷と云ふものが傳へられ必ず何々地獄と云ふ名稱が與へられて居る。油屋地獄、鍛冶屋地獄、坊主地獄、間男地獄など擧げ來れば實に應接に遑なき有様である。

第二節 さいの河原

これらの特殊な地獄の中で最も哀れ深く人口に喰炙し而も民心に多大の影響を及ぼして居るものはさいの河原の傳説であらう。

さいの河原は稚なくて死んだものが集まる地獄である。二歳、三歳、四歳、五歳、十歳とはならぬ稚兒が數かぎりもなく集つて河原の上に思ひくゞに遊び戯れて居る。日色闇倦として物のあやめもさだかならぬ薄曇りの霧の中に河原の小石を持ち運び父戀し母戀しの思ひに悶えてせめてもの廻向のために、いたいけの手に塔を積むのである。一重積みては父親のため、二重積みては母親のた

め、三重積みては故郷の兄弟姉妹眷屬我が身のためと廻向して、餘念もなく拜んで居る可憐のさまも、忽ち黒雲捲き起つて業風一陣、身に泌み渡れば、恐ろしい鬼が日月のやうな兩眼にはつたと白眼みつけ、鐵棒大地に突き立てつゝ、「汝等知らずや、何をかなす、娑婆に残れる父母は、旦暮に只歎くばかり、作善追善のつとめをせねば、みなこれ汝等の苦患を受くる種となる。汝等如何に歎くとも父にも母にも遇はれぬぞ、過去生々の悪縁ゆゑ命短く迷ひ來る今こそ目に物見せて思ひ知らせん」と鐵棒の音すさまじく追ひ立てられ、多くの稚兒右に左に追ひ立てられ、果ては一つ處へ追ひつめられ、詮方盡きて泣き叫ぶところに、虚空の中に光明輝き、六道能化の地藏尊、錫杖の音憂々と來たまへば、稚兒たちは我れ勝に、衣の袖、錫杖の端にすがり、聲を擧げて泣きつゝ、取り絶りつきまどふ。其の時大悲の地藏尊、忍辱慈悲の御胸の中に、抱きかゝへなでさすりつゝ、錫杖の柄をさしのべて、聚め取り、かきよせ、取り絶らせ、「汝等短命にしてこの冥途へ來りし不便のものや、幽明遙かに處を隔て、また父母に逢ふことも叶はねば、今はわれを冥途の父

母と思ひて、且暮我をたのめよや」と御聲やさしく告げたまふと傳へられる。尤もこの「さいの河原」の傳説の起原に關し種々の説明が施されて居る。小兒が塔を積むと云ふやうな思想はかの法華經の童子戯れに砂を聚めて塔を立つるなどの文から來たとも云はれる。然し此のいたいな稚兒の煉獄は如何にして民族信仰の内に發生したか。蓋しこれは頗る古い傳説である。かの有名な空也上人の作と傳へられる西院河原地藏和讃の哀調が民間の婦女子の胸に痛切な悲韻を傳へ始めたものとすれば實に年月を経ること八百餘年であるが、たとひ此の和讃を空也上人の作ならずとしてもこの傳説の起原は決して新しいものではないのである。

それはこの「さいの河原」の名稱が示して居る。「さいの河原は「西院の河原」である。西院とはかつて淳和天皇の御隠棲地であつた洛都の西の院であるから西院と名けて地名となつて殘つたのである。此の西院通の加茂川と桂川とが相合ふ所を佐比の河原と云ひ貞觀十三年にこの地を百姓の葬送地に定め

と云ふことである。後この葬送地は七條の方へ移轉したけれども、十五歳以下の童男童女はやはり左比の河原へ葬ることに定められた。此に於てか京洛中の小兒の葬處となり時の人は小兒を叱りて「西院の河原」へ遣つて鬼に攻めさせるぞと云へば恐ろしがつて啼き止んだと云ふ位のこと、小兒が死ねば「西院の河原」へ行くと云ふやうな傳説を生んだものであると云ふ。

それのみでない。「さいの河原」と云ふ名稱は一にまた小石の澤山あるやうな荒地を指さしたものである。何故それにそんな名稱が附けられたかと云ふにも我國に賽神と云ふ神祇がある。本名岐神といふ。これが支那の道祖神と混合せられ而して古くから石にその形像を彫り種々の石を供へて祭ると云ふ習慣があつた。小石の多い荒地は賽神の居られる場所と云ふやうな意味で「賽の河原」「さいの河原」と呼ばれるやうになつたのは自然の順序である。現に箱根の蘆の湖から町の方へ出る精進が池の傍に「さいの河原」がある。

一方に地藏菩薩は六道能化の菩薩である。この六道と云ふことが道路とい

ふ意味に通じやがて道祖神の本地は地藏菩薩であると云はれるやうになつた
岩代の須賀川町にある常法院には道祖神社があつてそこには八寸の地藏尊が
安置されてあると云ふ。

地藏菩薩と道祖神と賽の神といつしか渾然として合一せられ随つて道祖神
の居處たるさいの河原に地藏尊が祭られるやうになり又六道に於ける苦患の
巻を救ふ地藏尊と云ふ意味から「さいの河原」がやがて地獄變相の一として見
做され前の「西院の河原」「左比の河原」の傳説と結び付いて小兒の煉獄となつ
たものであらうとのことである。

有名な西院河原地藏和讃は次の如くである。空也上人の作と云ふ傳説は疑
はしいかもしれぬ。又時代の改削を経たことも些くはないであらうが其の製
作の起原は古いことである。即ち改削を経ない比較的古代の形が時として書
物の中に引用せられて居ると聞いて居る。此ことがよく此の事實を證明して
居る。

これは此世のことならず

さいの河原の物語

二つや三つや四つ五つ

さいの河原に集りて

こひしくと泣く聲は

悲しさ骨身を通すなり

河原の石をとりあつめ

一重くんでは父のため

三重くんでは故里の

晝は獨りで遊べども

地獄の鬼があらはれて

娑婆に残りし父母は

只あけくれの歎きには

民間の信仰に現はれたる地獄

死出の山路の裾野なる

聞くにつけてもあはれなり

十をにもならぬみどり子が

父こひし母こひし

この世の聲とはこそかはり

彼のみどり子の所作として

これにて廻向の塔をくむ

二重くんでは母のため

兄弟我身と廻向して

日も入相の其ころは

やれ汝等は何をする

追善作善のつとめなく

むごや悲しや不便やと

親の歎きは汝等が

われを恨むることなかれど

積みたる塔をおしくづす

ゆるぎ出させ給ひつゝ

冥途の旅に來るなり

われを冥途の父母と

幼きものを御衣の

あはれみ給ふぞ有難き

錫杖の柄にとりつかせ

いだきかゝへて撫でさすり

子を先き立てた母親孫におくれた老婆この哀韻にいかばかりその胸を波う

たしたことであらう。恸ういふ種類の民俗説話の文學は口から口へ耳から耳

へと傳へられるのみで、文書記録の上に殘らないのが普通であるから、これを文

苦患を受くる種となる

黒鐵づくりの棒をのべ

其とき能化の地藏尊

汝等命短くて

娑婆と冥途は程遠く

思ひて明くれ頼めよと

もすその内にかき入れて

いまだ歩まぬみどり子を

忍辱慈悲の御膚に

あはれみ給ふぞ有難き

獻に徴することが困難であるだけ、愈以て吾人はこれを丁寧に保存して置かねばならぬと思ふ。煩を厭はず記しつけたのもこの理由からである。

註(一) 俱舍論第十一卷に如上所論十六地獄、一切有情増上業惑、餘孤地獄各別業所招、或多、或一、所止差別多種、處所不同、或近山河曠野邊、或在地下空及餘處、見之、娑婆第七十二卷に「作如是説、曠部洲上亦有邊地獄及獨地獄、或在谷中、或在山上」と説いてある。

註(二) 日蓮上人御法の海と題する淨瑠璃に「みなこれ眞實しんぬの炭、ばつと燃立つ内よりも、鱗鱗の鳥うづ巻き立つて鐵の嘴ならし、羽をふるひ、眼をいからし勘作が、死骸にたかつて、肉をつき絶せば女房子は、のう情なや悲しやま、川にかけ下りかけ上り、くるひ歎くな上人制し、是ぞ冥途のくるしみな此世で晴らす現世の責、題目忘ることなかれと、あたりの小石を拾ひ寄せ、數多の石に七字の首題、日朗もろも一字づつ、書きつけ水へ投入わく、流に向つて題目を、書かせ給へば多くの鵜の鳥、一度に去つて勘作が、死骸は浪に入るよと見ゆしが、書かせ給ひし七字の題目、浪にありく、現れしは、成佛得脱疑なし、これ水流しの題目と、末世に傳ふる流灌頂、經水流しもこれさかや」とあるを見ても知られる。

註(三) 法華經方便品に「乃至童子戲、聚沙爲佛塔、如是諸人等、皆已成佛道」とある。

註(四) 左比の河原の舊趾、四條千本の西方に土手のあるまゝころがそれである。河原も後に畑となつて東西から次第に縮めせり寄せたから「せり川」と云ふ小川となつて居ること。寶曆七年に章瑞と云ふ人が作つた西院河原口號傳と云ふ書物に書いてある。現今では烏羽村大字塔森の南にありま浩々洞編佛敎辭典には出て居る。又同書に大和添上郡の狭井川(率

民間の信仰に現はれたる地獄

川)のこゝであるとも見えて居る。

註(五) 本文さいの河原につき左に廣瀬南雄氏の考證を摘録する。

も道祖神といふは支那の古神で、前漢書十三景王傳の「榮行祖於江陵北門」とある註に「師古云、祖者送行之祭、因饗飯也、昔黃帝之子累祖好遊遊而死于道、故後人以爲三行神也」とあつて、旅行好であつた黃帝の子累祖が途上で死んだのを神に祀り、發行出神などの時、凡て道送の饗送にこれが行ひものが彼國上古からの習俗になつてあつて、道祖の祖は累祖の祖から轉じたものらしい。既に「詩經」の大雅に「仲山甫出祖」とあつて、註に「祖將行饗之祭也」といひ、饗といふについては「取旃以饗、祭行道之神」といつてある。「春秋左傳」昭公七年にも「夢襄公祖」とあつて、註に「祖祭道命」といつてある。要するに道祖神は支那上古來の行道の神の稱であるには違ひない。

所が記紀に伊弉諾尊が黃泉牧坂で根國から追ひ掛けて來られた伊弉册尊を防ぐ爲にその持ち給ふた御杖を投げ棄てられた。その御杖の神と成り給ふたのを衝立船戸神又は岐神といふ。それを「書紀」の一書に「此本號曰來名之祖神」といつてある。即ち祖神の名が我國の記紀に出たもの、嚆矢である。「右史徵」に祖神を今本にオホヤカミと讀めるは非訓で、サヘノカミと訓むべきよしいつてある。「倭名鈔」には「漢語抄云道神佐閉之賀美」と出て居る。即ちこれで見ればサヘノカミといふのは岐神の稱で、それが支那の道祖神に合體した事が明かである。何故、岐神をサヘノカミといふかといへば、此神は「道饗祭祝詞」に八衢比古八衢比賣久那斗と御名は申して根國底國から荒び來る諸の惡魔を防ぎ給ふ神だあつて然坐といふから塞神といつたものである。即ち防塞の意味である。而して支那の道祖神の祭祠が行旅の障礙を防ぐに於ける所から、丁度、今の岐神の事蹟に似て居るので書紀にサヘノカミといふ所を祖神と誌し、二神合一の端を啓くに至

つたのである。柳田氏は道祖の祖を解して阻つるといふ阻の義であらうといつて居られる。然るに猿田彦命は天神降臨の際の嚮導の神で、今の意味にはふさはない。後世、猿田彦命も道祖神と同一にせられ、そんな考證もあるのは書紀に「神を備神と記されたに基つて誤られたのであらう。而して塞神が岐神で邪惡神の侵入を防ぐといふ意味が、能く又、塞河原の本尊たる意味と同じで、地蔵さんが小兒の爲に地獄の鬼の襲來を防ぐことなるのである。そして塞神に石を供へることは昔からのことで、さいの河原さいふこもそれに基づくのだが、之は諸尊が黃泉牧坂で千引石を置きて妹神の來られるのを引き塞ぎ、それを間に置いて問答せられ、それから御杖を投げて「これより内に還り給ふな」とのたまふたさある、その石に關係して居るものであるらしい。猶、地蔵菩薩が塞神の本地となつて、塞河原の主と成られた事に就いても言ひたい事があるが略する。唯、地蔵の錫杖は岐神に聯關したものであることは略想像がつく。

結 論

以上異敎の地獄に端を起して佛敎の地獄に及び印度傳來の經典から敘述を始めて支那日本に於て成立した經典を一瞥し日本の民族中に發達した地獄の思想を紹介し終つた。

さて眞宗に於ての地獄觀は如何源信和尚はもとより眞宗七祖の第六祖になつてある。勿論その撰述せられた往生要集は正依の聖敎として用ひられて居る。随つてその厭離穢土の卷に現はれた正法念處經などの地獄はかれこれと異議を挾むべき餘地もない筈である。親鸞聖人は和讃に念佛を疑謗するもの、墮獄すべきことを明かに述べて居られる。「念佛誹謗の有情は、阿鼻地獄に墮在して、八萬劫中大苦惱ひまなくうくとぞ説きたまふ」と云ひ、又は「衆生有礙のさとりにて無礙の佛智を疑へば、曾婆羅頻陀羅地獄にて多劫衆苦にしづむなり」又は「三途の黒闇ひらくなり」と見えて居る。存覺上人の淨土見聞集に至

つては支那にて發生した地獄思想なる十王經を敷衍してある。又蓮如上人は御文に、「されば死出の山路のすへ三途の大河をばたひどりこそゆきなんすれ」とこれ亦十王經に言及して居られる。往生要集がかゝりの地獄は印度に根源を有して居る説であつてもかく印度傳來の經典と云ふからに文證としての權威もあると云へやうが支那出來の十王思想の冥府の王の裁判などは明かに文證としての權威を缺いて居る。それをば堂々と眞宗の聖敎の中に引用してあるのは如何したものか。如何に室町時代に民族信仰の影響を受けたればとて文證の價值さへなき偽經を採用すると云ふことはあまり無謀ではなからうか。或はこれを隨他意方便の説誘引のための隨宜説と云ふか。さう云つて仕舞へばそれ迄だが、それでは存師蓮師を活す所以では無からう。即ち存師蓮師は内心に慊焉たりながら表面だけかゝる説を唱へられたと云ふやうなことになるのである。然し恐らく左様ではあるまい。存師蓮師には表裏は無い尤も存師は淨土見聞集の卷末に多少の申し譯を述べて居られるが、さればと云

つて内心と違つたことを偽つて書かれると云ふ譯はあらうとも思はれぬ。果して然らば如何にこれを解釋すべきであらうか。請ふ一言を費やさしめよ、予を以て見れば十王經の冥府思想も、民間に發達した地獄思想も、時代人心を支配し、影響せしめた思想である以上は、その時代人心にとつては實存實在のものであり、決して虚誕荒唐の空想では無いのである。さるからに十王の思想もさいの河原も血の池地獄も立派に當時の人心に於て權威を有して居つた。又現今の時代に於ても、恐らく又將來に於ても、犯すべからざる權威を以て望むであらう。文證たるの資格があるか無いかは時代に對する影響如何を標準にするより他に路が無い。印度傳來であるからその經典に權威がある、支那で出來た偽經だからその經典は權威が無いなど、考へるものがあるならば、それは全く間違つた夢を見て居るのである。齊しく印度傳來の經典でも、精密な聖典批評にかけて見るならば、果してどの點まで信用が置けるか甚だ覺束ないものである。佛説の文字は明かに冠してある。如是我聞の形式は整つて居る。さは

いへ恐らく經典と云ふ經典は時代人心の産物ならざるもの果して幾何かある經典が悉く時代人心の投影であり、信仰ある憧憬者の所産でありとすれば、此の點に於て、正法念衆經や觀佛三昧海經などの印度傳來の經典と、十王經や日本民間信仰の傳説とを區別する劃線が果して何處に引けるか。後者を偽經として蔑視するならば、前者が何故に偽經で無いか。予を以て見れば兩者共にこれ時代人心の反映であり、民族精神の結晶である。予はこの意味に於て、民間信仰に最も重きを置き、これを認定の經典と同一列に見做して叙述を進めて來たのである。かくの如く觀察し來る時予は存師の淨土見聞集や蓮師が死出の山三途の河に言及して居られる雅量に敬服せざるを得ないのである。次に又一步を進めて、上來の叙述に就きて精細に觀察すれば、佛敎の中に於ける地獄思想の煩瑣且つ蕪雜なるに一驚を喫せざるを得ない。統一あるが如くにして其の實更に統一が無い。或は甲説が乙説と撞着するかと思へば、一の傳

説は變じて他の傳説となり、又更に他の傳説を生み、展轉して全く別種のものとなる。かくの如くして支離滅裂到底これを首尾一貫した形式に收め纏めると云ふやうなことは不可能である。蓋しこれ時代を云はば上下二千年に垂んとする長い間場所とは云はば東西幾千里に亘る廣い國々、その間に棲息する幾千萬の人々の胸の底をかいくつて種々の様式となつて現はれた思想であるから、恚うした變化や亂雜は決して不思議では無い。寧ろその割合に一致の多いのを怪しまねばならぬ位である。さてかやうに佛敎の地獄は煩瑣で蕪雜である。統一は到底困難である。

たとひこれを統一し得たとした所で、婆羅門敎にはまた別種の地獄がある。回々敎にも別種の地獄がある。それ、特殊の色彩と各別な様式をもつて傳へられて居る。地獄は全く無數である。

此の事實は果して何を示して居るか。かく多種多様にして而もその間に矛盾と撞着の多い事實、これはとりも直さず地獄と云ふものゝ有様が文字や言句

の上には現はすことの出来ないものだと云ふことの證明では無いか。言ひ換れば經典の上の地獄は文字通のものが存在すると思つたら間違ひだと云ふことを證明して居るのではないか。全く地獄の有様を文字通に取つたとしたなら噴飯すべき滑稽が起るのである。此に布敎家の用意があつてほしい。然らば地獄は何處までも荒誕不稽のものであるか。否予は然らずと云ふ。吾人心頭の曠恚の一念はその恐るべき炎を以て忽ち吾人を攻めざるか。これをしも炎と云はずんば何を以てか言ひ顯はすことが出来やう。他に何等の言葉が無いでは無いか。

たかぬ火の胸にし燃えて苦しきは

心の鬼の身をせむるなり

此に吾人は地獄の縮圖を見ることが出来る。又見よ「今世に現に王法の牢獄あり。罪に随つて趣き向つて其の殃罰を受く。」幾代の民族は東西を問はず文野を論せず一様にこれを自覺した。さればこそ種々の様式に於て種々の地

獄の苦痛は説かるゝやうになつたのである。何れの處にも何れの時にも地獄の思想の存せざるなき事實洵にこれ一大事實である。これ實に無言のうちには地獄の實在を證明して居るものではないか。されば各民族の地獄はそれ〴〵その民族が叫ぶまいと思つても叫ばねばならなかつた眞箇胸臆の叫び聲なのである。これや釋尊を俟つて始めて知るべきではないのである。

此の地獄の厄難を閉ぢて善趣の門を開くことが宗敎の第一義諦であり、布敎家の工夫一番を要する所では無いか。

註(一) 曾婆羅類地獄は如何なる典據かと云ふことに就て博覽深淵講師の如きすら已に匙を投げて居る。今に於て何人もこの的確な典據を指すことは出来ないのである。名號利益大事因緣經云ふもの〴〵中に見られたる果してこれが宗敎の時代に存在したか如何か疑はしい。若し存在したと云ふ確な證據があれば宗祖は之を見て製作せられたものと云ふ斷定が出来ぬ。

佛敎地獄論終

泉 芳 環 著

佛敎極樂論

總 論

民族のあるところ必ず宗敎あり宗敎のあるところ必ず樂土苦界の對立がある。云ふ斷案にさまで多くの例外が認められないとすれば地獄と極樂とは人類思想の終始を一貫する大綱と云ふことが出来やう。少くとも佛敎に於てはこの問題が最も重要な部分を占めて居るのである。されば佛敎にては地獄に就て極めて詳細に記述して居ると同じく否それ以上に極樂に就て亦非常に委しく説いて居る。

初めに佛敎の極樂に論及する前に先づ異敎の樂土思想を一瞥する必要がある。何となれば一の事物を明かに知るためには他の事物との比較に依ること

が最も當を得た方法である。加之異敎の樂士思想なるものは佛敎のそれと互に影響し關係して居る所が決して少くない。時としては異敎の樂士思想が佛敎のその根本思想となつた所もあらう。これらの交渉の迹を辿り行くことは頗る困難なる問題であるから非才自分の如きを以てしては容易に企及し得べからざる所ではあるが然し佛敎の極樂を叙するに當つて少くとも其の背景として異敎の樂士思想を叙することは必ず先づ爲さねばならぬ課程であらう。この背景の上に佛敎の極樂を論述したならば其の便益決して尠少ならざるべきを信するのである。

異敎の樂士思想に一瞥を與へた上は淨土思想に進まねばならぬ。然るに佛敎の淨土思想は頗る複雑多様であつて其一々に就て詳細に論述するが如き事は恐らく不可能の事である。然し淨土思想は地獄思想の如く無統一で無い兜率淨土十方淨土極樂淨土これらの思想の間には髣髴として脈絡あり關係あり其發達進展の迹を追へば理路の自から一貫せるものあるを覺ゆるのである。

即ち兜率淨土も十方淨土も終に西方淨土の思想に最後の一籌を輸せざるを得なくなつた。かくて西方淨土の思想が最後の統一者として佛敎の中獨り覇を唱へて居るのである。故に吾人は先づ經典に現はれたる淨土思想を順を追ふて論述し然る後これが史的發達の徑路を釋ね以て眞意義の那邊に存するかを驗することゝしやう。

本論

第一編 異敎の樂士思想

第一章 埃及民族

人文の歴史は埃及にその曙光の幕を開いた。埃及は人類最初の記録を有して居る。即ちかの形象文字には世界最古の思想が表現せられ、巨人の如く天を摩して居るかの三稜塔は、永劫の秘密を藏して居る。然るに學者は驚くべき才能と努力とを以てこの秘密を明かにした。即ち鳥の形、人の形が相接続して居るやうな形象文字を読み得た結果、最古の人類にも成立せる宗教思想の儼在せることを確認した。而して勿論この中に已に樂士の思想は充分に現はれて居るのである。

三稜塔の内壁にも死人審判の繪畫があれば、古代の祈禱を記した死人の書の

中からも死後の生活に關する當時の一般觀念を知ることが出来る。三稜塔は埃及及古代の民族が死後の靈魂を安樂ならしむるために、莫大の費用を投じて造り上げた墳墓である。古代の埃及人の考へでは、靈魂に二種あつて、一をカーと云ひ、肉體は死んでも、その肉體が若し何等かの方法で保存せられて居る限りは肉體に憑つて存続すると云ふ風に信じられて居た。それで埃及の古代民族は死體を木乃伊として永久に保存することに骨を折つた。又もう一つの靈魂をパーと云ひ、肉體の死と共に鳥に化して昇天し、オシリス神の樂士なるアールの野に至り、快樂幸福を享受し、或は進んでオシリス神そのものと融合一致するに至ると云ふ。死人の書は死人の柩の中に收めることになつて居る。或は死人の身體の一部に着けて纏帶で其の上を巻くことになつて居る。アールの野とは善人の往くべき樂士であつて、種々の快樂の器具を充滿し、船を泛べて樂める有様は今に至るまで繪畫として殘存して居るのである。

之を要するに三千年以前の太古に於て、埃及民族は已に死後に於ける樂士の

思想を有し而も其の死後の安樂に資するためには現世に於て如何なる犠牲をも拂ふに躊躇しなかつたことは驚くべき事實と云はねばならぬ。

第二章 ギリシア民族

極めて現世的であつて、死後の生活に重きを置かないのはギリシア民族である。神々の集ふオリンポスの山は決して死後の境界でない。現世のことである。ギリシア民族は少しも陰鬱な影を有つてゐない。随つて死後の觀念など頗る曖昧模糊として居る。然しながら、それにも關らずギリシアの神話によれば、地獄にタルタロスあり、下界ハーデスあり、又世界の西方にはエリジオンなる樂い國土がある。エリジオンは戦歿した勇士の趣くべき場處であつて、これ明かに埃及民族のアールの野と等しく、一種の樂土である。「エリジオンには雨雪の苦なく、凍寒の恐なし」と詩聖ホメロスは歌つて居る。

更にこれを哲人ソークラテースに見れば大に思半に過ぐるものがある。彼

は紀元前四百六十七年の頃ギリシヤに生れ、無辜の身を以て獄に囚はれ、終に死刑を宣告せられてヘムロックの毒杯を飲んで獄裡に果てた。其の生涯の言行を其の弟子プラトーンが詳細に記述したもので、即ちプラトーンの對話篇が残つて居る。勿論これは多少プラトーン自身の説を加味して居る點もあるが、兎もかく紀元前五世紀ごろのギリシア思想を代表したものと見做して差支なからう。このプラトーンの對話篇の中には所々に死後の世界のことを論じて居る殊に其の中、フイドロンと云ふ一篇には頗る興味ある一節が見えて居る。

これによれば、此の世界は球形のものであつて、蒼天の中央に位して居る。吾人はこの球體の内部の海底に住んで居るのであつて、吾人の天を望むことは恰ど海底に住んで居る動物が水面を望んでゐるが如くである。

而して世界は十三層の柔皮の片を以て包まれ、星辰の如き天體はこの層に沿うて運行して居る。上界の美は實に下界の比ではない。色彩も下界のものに比すれば、光輝ありて明瞭である。其の色或は紫色或は金色或は白色である。

又この美麗なる上界には美はしき樹々花さき實り、丘陵岩石は滑らかに透明である。下界の青玉も瑪瑙も及ぶところではない。又氣候は溫和にして其の處に住むものには疾病もなく、下界のものより遙に長命である。其の感覺の如きも下界のものより極めて勝れて居る。又其處には聖地も神殿もある。而して人々は真正に神の聲を聞き、對話をなすことが出来る。而して若しも能力の堪へ得るものは下界より登つて上界の美觀を見ることが出来るのである。

この一節を読むもの、誰あつてかかの印度思想にはゆる欲界色界などの天界の有様を想ひ起さずに居られやう。思ふに紀元前四五世紀と云へば印度では釋尊の滅後の一二世紀を含む時代に當り、或はこの頃已に印度の思想がギリシアの思想に影響を與へて居たかも知れない。たとひ兩思想が全然關係を有して居ないとしても處を異にしたギリシアと印度の兩地方で時を同じくしてかくも相似た説が興起すると云ふ現象に對しては、吾人は實に奇異の念なきを得ないのである。時代人心は同一の課程同一の徑路を取つて、思想を進めて行

くと云ふ一大事實が、この天地間に存在して居るのではあるまいか。これ實に天地の不思議であり永劫の秘密である。

第三章 ヘブライ民族

ヘブライ民族は本來宗教的觀念に富んで居る。即ち自ら神によつて選ばれた民族なるを信じて、常に神の言葉を理想として進んだ。かくて猶太の國には相次で幾多の豫言者が輩出した。この豫言者は一様に選民たる猶太國人の無自覺を絶叫し、天國と神の審判と云ふことに力を入れて唱へて居る。然しこの天國といふ言葉は最初更に死後の世界の意味を有して居なかつた。舊約時代の豫言者は神の意志をこの地上に實現することが天國であると唱へたのである。世界の終末に神の審判を受けて悪人はその罪の報を受け、善人は神の許に往き、神はシオンの山に一大饗宴を開くなど云ふ思想も必ずしも死後の世界の意味ではない。耶蘇に洗禮を授けたヨルダンの野のヨカナンが天國は近づ

けり悔ひ改めよと大聲叱呼したのも、現世に正義の王國が建設せらるゝの意味であつた。又當時の民衆はローマ帝國の壓迫から救ひ出されて自由の王國が成立することゝ想像して居た。何れにしてもあれだけ宗教的觀念に富んだヘブライ民族でも死後の世界と云ふ考察に就ては、さまで具體的な思想は無かつたのは奇とすべきである。耶穌も神の國と天國とを同意義に見て、現世に正義の行はるゝことゝして居つた。先づ強めて云ふならば舊約聖書のエデンの園は一種の樂土と見ることが出来る。

「エホバ神エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其處に置きたまへり。エホバ神觀るに美はしく食ふに善き諸の樹を土地より生せしめ又園の中に生命の樹及び善惡を知るの樹を生せしめたまへり。河エデンより出で、園を潤ほし、かしこより分れて四の源となれり、その第一の名はピソンと云ふ。これは金あるハビラの全地を繞るものなり。其地の金は善し又ブドラクと碧玉かしこにあり。第二の河の名はキホンと云ふ。これはクシの全地を繞るもの

なり。第三の河の名はヒデケルと云ふ。これはアツスリアの東に流るゝものなり。第四の河はユフラテなり。」(創世記、第二章、八—一五)

ミルトンの不朽の傑作失樂園は、譬へしなき雄渾壯麗の筆致を以て、這般の消息を描き出して居る。「沙白く苔碧きイーゼンの里には、一河の流れ長く、東の空なる薄紫の山間より出で、花散る御園の岩根をくゞり、靈樹の蔭に湧き上つては、汲めども盡きざる甘露の神泉となり、金砂の小山を急ぎては、虹の浮橋影さやに、銀沙の小川をたどりては、天の河瀬の音すゞしく、青葉の森には、碧玉の池を湛へ、紅葉の林には、水晶の瀑を懸け、落ちて分れては、四筋の川波音高く、名ある靈地をさまよひて、西の空なる薄紅の雲間に消えてゆく、斯るいみじき河の水にうるほひて、奇しき造化の御足の趾に咲きこぼれたる花のいろく、或は朝霜かぐはしき岡の上に、日出でぬ間の日影まばゆく、或は日ざかり暗き蕙の眞洞に、時ならぬ星月夜の星影明く、或は夕霧匂ふ芝生の露に、夜光の玉の光を磨き、或は小夜風さゝやく池の水際の漣に、空に知られぬ有明の月の笑顔を洗ふ。この水を

吸ひ、この花に酔ひて鳥は東雲の青葉が上に朝の祈禱の聲高く、いさましき山彦王が朝寝の床をうごかし、虫はたそかれの紅葉の蔭に夕の祈禱の音も細く、やさしき木魂姫の假寝の搖籠をゆする氣色、天樂隊の妙なる調にも厭き果てたる月の夜毎情ある天津神々忍び来て、花白き河瀬の波に耳やすらむ。」

さしにも楽しくいみじき花園ではあつたが神の禁断の菓を食ひて、人類の祖なるアダムとエバは端なく神の怒に觸れ、遂に樂園を追放せられてしまつた顛末を、天上の大悪魔セータンが小蛇となつて誘惑したことに構想して作り成せしものが失樂園の長詩一篇である。然しながら舊約時代でも新約時代でも神の國、天國と云ふ時は、來世、死後の世界と云ふ意味では無かつたのである。然るにいつしか天國と云へば死後神に祝福せられた光榮ある世界と云ふ意味を有するやうになつた。恐らくこれは中世時代の神學說に本づくものであらう。即ちカトリコの教會說に従へば、地上の教會は見ゆる神の國である、眞の神の國は文字通りに天國であつて、天に於てのみ實現せられ、實にこれ見えざる

教會なりと云ふやうになつた。されどかゝる中世の神學說はプロテスタント新敎に於ては認めてゐない。この中世神學說より成立した天國の思想は後段に至つて更に述べる。

イタリアの詩人ダンテは懊惋の調を以て地獄の悲惨を歌つた後、微妙莊嚴の天界に説き及んで居る。これ實に中世基督教に於ける樂士思想の代表的標型と云ふべきである。

即ち地獄の最底大魔王の罰せられて居る地心を越えて、南半球の地表に出れば、東の方青玉の艶なる彩り、澄み渡る第一天に擴がり、曉の光暗を破れば、遙かに大海の打ち顔へるを眺むる朝より往かふ多くの靈を分けて、夕されば客愁に咽ぶ鐘の響に、晩禱の讃歌誦するを聞きつゝ、行く程に淨罪界の門に行き着いた。時しも城壁の中央なる門には、三級の階段が見える。下段は心の純潔を表した純白の寒水石、中段は罪の懺悔を表した濃き藍色の荒砥、上段は神の愛を表した紅白の斑石、石脈からは血が迸つて居るやうに見えて居る。教會の礎を

表した金剛石の戸口天人の手にある金銀の鑰金なるは權威銀なるは智識の表象である。此處にダンテは額の上に鈍き劔の尖で七個のP字を刻まれる。これは罪の表象であつて淨罪界を辿り行くうち次第々々に一つ宛消えて行くのである。

最後にダンテ幼年の日の戀人ベアトリチエに導かれて宛ら若葉に粧ひ新なる若木のごとく清くなりて天界に進み入る。雲を分け日光に向ひ縹渺たる天空光明赫奕たる中を飛翔して第一月光天第二水星天第三金星天を経て第四日光天に昇り宇宙創造三位の聖位神工の完美空間の大なる秩序を見出し體得する。第五火星天に燦爛たる聖氣の光燃え立つ星の笑神愛の宏大なるを念じつゝあれば忽然として信仰の戰士等の白く十字架の形を成せるが出現する。紅の光まばゆき中に銀河の如き白き光が照り輝く。第六木星天には靜光漂ひ一地を治むるものよ正義を愛せよ」の文字相列び最後の字よりは金銀の光を放つて居る。第七土星天金階高く連り華やかな光明の群衆が昇り降り降して輝き漲つ

て居る。この時下界を見れば天界歴遊の跡掌を指すが如く月の光面天體の運行地球上の分水の嶺に至るまで燎然として眼底に映て居る。第八恒星天には信愛望の三徳完き聖人が住んで居る。ダンテは此に天界の食を與へられ聖衆歡呼して回轉し法悦の光あふれ渡る。此に原人アダモに出會つて天地創造の古原罪の性質を聞く。時に天界頓にごよみ渡りて讚歌の聲に耳目共に酔へるが如くなる。第九原動天九級の囀は中心に近づく程回轉の速力と光輝の熾烈を増を見第十大光明天に聖母マリアを拜し崇高雄大なる祝禱を捧げ眞白の薔薇の花に蜜蜂の如く數限りなき聖衆の群を見る。かくの如き十個の天界はそれごとく徳行の表徴になつて居りその間に古來の善人賢王など幾多の人々が配當されてある。これ西紀一千三百年の春とある金曜の夕、フイレンチエの影暗き森に一週日の冥想を凝らしたダンテの幻である。とは云へ中世神學說の樂士思想を表現した代表的のものと云へる。

次に降つて一千六百七十六年の春から夏にかけて英國ベッドフォードの橋畔

の牢舎の中に、ジョン・パンヤンは天路歷程と云ふ物語を草した。年を隔ること三百七十餘年處を距つること南北千里爾も兩者の間には著しい類似が見られる。吾人はダンテの神曲によつて中世時代の基督教に於ける樂士思想を想見し得ると共に又パンヤンの天路歷程によつてよく十七世紀末葉に於けるその代表的叙述を發見することが出来るのである。

ダンテは森蔭に眠つて幻を見た。パンヤンも洞穴の中に眠つて夢を見た。夢は一人の男が重荷を負うて旅路に出かけるところで始まる。この男の名は基督教者と云ふ。彼は種々様々な誘惑と戦ひ、困難に打ち勝つて、終に天界の門に近づいた。兩個の輝ける人が迎へて呉れて、身輕に足早に空中を行くやうにシオンの山天のエルサレム、千萬の天使の住む淨樂園に向つて行く。

又一群の聖軍に迎へられ、白く輝く衣を着た樂人が現れ、歡呼と喇叭の聲が高く響いた。見渡せば自分達は天使の群に圍まれてゐる。

さて門に着くとその上には金文字で聖語が記されてある。彼は證狀を出し

て門に入ること許された。門に入ると共に衣服は黄金のやうに輝いた。而して豎琴と冠とが與へられた。豎琴は神を讚美するため、冠は榮光の徴である。

門が開くと都城は日輪のやうに輝いて居る。街路には黄金が鋪きつめ、往來の人は頭に冠を頂き、手に棕櫚の葉と黄金の豎琴とを持つて讚歌を歌ひつゝ歩いて居る。又そこには翼のあるものも居る。絶間なく互に呼びかはして「聖かな、聖かな、聖かな、主よ」と云つて居る。

ダンテの幻もパンヤンの夢も共に基督教の傳説を基礎として居ることは明かであるが、パンヤンの記述は明かに約翰黙示録から材料が取つてある。

「われ靈に感じ、天使に携へられて大なる高山に至れり。此にて我に大なる城、聖エルサレム、神の榮を以て神の所を出て、天より降るを示す、其城の光輝くこと至寶き玉の如く、澄徹る金剛石の如く、此に大なる高き石垣ありて十二の門あり、其門に十二の天の使をれり、門の上に名を書せり、イスラエルの十二の支派の名

なり、東に三の門あり、北に三の門あり、南に三の門あり、西に三の門あり。……石垣は金剛石にて築き、城は清潔なる玻璃の如き純金にて造れり。城の石垣の基趾は各様の玉にて飾れり、第一の基趾は金剛石、第二は青玉、第三は赤玉、第四は緑玉、第五は紅玉、第六は黄色の玉、第七は薄き黄色の玉、第八は水色の玉、第九は紅玉、第十は翡翠、第十一は深紅の玉、第十二は紫の玉なり、十二の門は十二の眞珠なり、一の眞珠にて一の門を造れり、城の衢は澄徹る玻璃の如き純金なり、われ城の中に殿あるを見ず、蓋主たる全能の神及び羔、その殿なれば也、又城に日月の照す事を需めず、蓋神の榮光これを照し、且つ羔、城の月燈なれば也、……天の使生命の水の河を我に示せり、其水澄徹りて水晶の如し、神と羔の寶座より出づ。……かれらは世々窮なく王たらむ。(約翰黙示録第二十二章—第二十三章)

上に牢固たる根基を有したことは疑ふべからざる事實である。

註(一) ダンテの神曲は上田敏氏詩聖ダンテの叙述に據つた。

註(二) 天路歷程は松本雲舟氏譯に據つた。

註(三) ミルトンの失樂園の叙述は繁野天來氏の失樂園物語(五五—五七頁)に據つた。

第四章 回々敎の樂士

アラビアの野に劔とコーランとを提げて立ちし回々敎祖ムハンメツドの胸裡には、抑も如何なる天國があつたのであらうか。

コーランの經卷の中、樂士に關して言及すること無慮四十箇處、その中最も代表的な章句の二三を擧げるならば次の如くである。

まことに信仰深きものにとつては、殊勝なる住處がある。エデンの園その戸はかれらのために開かれてある。其の處にうち凭れて「果物と飲料を持ち來れ」と呼ぶのである。又その傍には己が年齢にふさはしき耻かし氣の眼をも

つ乙女がある。「こはみな審判の日に汝が與へられたるものである。」「これ確かにわれらの財産であつて、無盡藏である。」東方聖書、第九卷、第二、一八〇頁
 天國に入れ、汝と汝の妻妾よ幸あれ。黄金の皿と甕とが汝の前に至るであらう。その内には心の欲するもの目の樂むものすべてがある。汝は永劫の間その處に住居するであらう。蓋し天國は汝の行に對し遺産として與へられたものだからである。(同、二一六頁)

まことに信仰深きものは安穩の處に行くであらう。林泉の間に相對して、繡子と太絹の衣服を着輝く大なる眼の乙女を妻となし、一たび死せし以上は、其處にもはや死を味ふことは無く、地獄の苦を去りて神の惠の大樂を得るであらう。(同、二二〇頁)

列べる欄に凭れて大なる眼の乙女を妻となすであらう。(同、二四九頁)

信仰深きものに與へらるゝ天國の譬喩——そこには腐らぬ水の河、乳の河がある。その味は變ることが無い。飲むに旨き葡萄酒の河清くなされた蜜の河も

ある。果物はあらん限りの種類があり、神は採ることを許したまふ。(同、二三〇頁)
 銀の器皿と把手付きの徳利、それで量り分けることの出来る銀の徳利——一のやうな大蓋が前にあるであらう。かくて蓋の味を配合した酒を汲みかはそののである。これシルサビールと名けられた泉である。永しへに姿の變らぬ小童が走り廻り、眞珠の散るやうに見えるであらう。汝がこれを見るや、快樂と大なる財産なりと思ふであらう。又緑の縫とりせる繡子と錦襦の衣服を着、銀の腕環を飾り、神よりは清き飲料が與へられるであらう。實にこれ汝に對する報酬であり、汝の努力が感謝せられるのである。(同、三三三頁)
 これら經典の文に於て吾人は明かにかの舊約聖書のエデンの園を想起せざるを得ないのである。蓋しこれエデンの園がアラビアの衣を着て居るに過ぎないと云ふ感がある。小川、泉、酒、蜜、美少女等が快樂の對象となれるを見れば、以て敎祖敎徒の理想の奈邊にあるかを想像するに難くない。

第五章 印度民族

下つて印度古代に於けるかの吠陀民族亦天上の光明を讚美して死後に生るべき國土はこの光明の天界である、多くの祖先も已に天界に生れて繁茂せる樹蔭にソーマの酒を飲めることを歌つて居るところから見ても、二千餘年の古代にありて、已に樂土の思想が髣髴として現はれて居るのである。

由來印度民族の思想は雄大奔放であつて端倪すべからざるものがある。而して次第にこれを跡づけて遡り行く時は、自ら吠陀讃歌の時代にまで辿り着くことになる、吠陀讃歌の時代といふのは太古沖邇の時に始まつて、紀元前一千年頃に至る間を云ふので、恰もこの頃アールヤ族に屬する印度民族が中央亞細亞の高原を下つて、印度の西北の五河地方に殖民を始めた。かくてかれらはその地方の蠻族を征服し、洋々たる印度河の畔、綠草生ひ茂つてゐる豊沃な平野のうち、羊を牧し、牛を放ちて居るを定めた。仰いで、日月星辰の天然現象を

畏敬し、俯しては印度河の徳を讚美し、清明なる天地に安らかな平和を樂みつゝ、自然の恩恵を詠嘆して居つた。これが即ち吠陀の讃歌となつて、かれらの口から送り出たので、この吠陀讃歌に現はれた宗教は、光明の方面を憧れてゐる、割合に樂天的の性質を帯んだものであつた。何しろ土地は豊饒である。人民の數は少い。飢え來れば食ひ、暗し來れば眠る。たゞもう思ふまゝに天然の現象を讚美して、大自然の懐のうちに樂い生涯を送るより、外に何物もなかつたのである。暗黒な厭世的思想や、恐ろしい地獄の苛責など、いふやうな考へは、吠陀時代では發生すべき餘地すら無かつたらしい。吠陀讃歌の中から乏しい材料を綜合し來つて、言ひ得べき精一ばいのごとは、不信者が死後地下の暗黒の中に投せられると云ふ位に過ぎない。然しこれとても極めて曖昧であつて、暗黒といふのが如何いふ風のものだか、其處は極めて不明瞭である。だが曖昧ながらも、光明の世界と暗黒の世界とを對立して、善者はこれを天上の光明界に送り、不信者即ち惡人は地下の暗黒の中に投げ入れるとの思想は認め得られるので

ある。然しこの暗黒界に如何いふ責め苦が有るかに就ては云つて居ない。只インドラとソーマとがこの光明界と暗黒界との兩界を支配する神であつて、神の恵を得て天上界へ生れやうと思へば、神に供物を捧げねばならぬと云ふことが見えてゐるから、多少報償の觀念があつたと云ふことは云へるであらう。

吠陀の民族が世界といふものに對する觀察も極めて簡單である。何しろ蒼茫たる大空の天然現象と、洋々たる印度河の流を望み見て、農業牧畜で日送りをしてゐるかれら民族にとつては、只夫れ望み極まる處それが世界であつた。人の外には天界も地獄も無かつたのである。然し何れの處にも、如何なる時代にも、人は水上の泡沫のやうに、或は生じ或は死し行く、昨日今日まで歡樂を共にした親族同胞も、今や冷かなる殘骸を留めて再び語らないやうになる。是れ果して何の現象であらうか。この驚くべき死と云ふ事實に遭うてかれら吠陀民族は果して如何なる態度を取つたか。靈魂の不滅を信じたかれら民族にとつては、死者が何處かへ旅立をしたのであると思ふ外に仕方が無かつた。而して死

者何れの處にか旅立する。天上に絶えざる光明の現象が見える。誰も達し得られない天上の世界、かれらの憧憬の中心となつて居る天上の世界、其處に死者は旅立ち行くのであると考へるやうになるのは、理の當然である。

偕また吠陀の讚歌の中にヤマと云ふ神がある。ヰヴスヴント即ち太陽の雙生兒であつて、妹の神をヤマミと云ふ。このヤマ、ヤマミの雙生の神が始めて人類の死後行くべき路を發見し、人類を導いて祖先及び諸の神々と共に綠樹の蔭にソーマの酒を飲んで、樂く日を送らせる。死者を導くものは二頭の狗である。この狗は四個の眼と廣き鼻を有して奇臭を放つと見えて居る。蓋しこのヤマ神は始めて日没の光明現象を表はしたものでらしい。日の没するや、恰もこれ人の死と比すべき現象である。だから終には死者を支配する神であるといふやうに想像せられ、人類の死者を導く神とせられたのである。

ヤマ神に捧げられた讚歌は、ソグ吠陀の中に三つ程あるが、みな美しい詩的人格をもつて描かれてゐる。

「いと高きところに沿ひて行き、
 多くのものゝ行くべき路を求めし、
 非ヴスワットの子、人々を集め去るものなる、
 ヤマ王に、犠牲を供へて敬禮せよ」

○ 「前方真直に過る路を走れる二つの狗、
 サラマ一の兒ら、四の眼、黒き雜色なるが、
 恵み深き祖先に近づき行く、
 祖先はヤマと樂く酒飲めり」

○ 「廣き鼻の褐色なすヤマの使ひは、
 生命を食ひ食はんとて人々の中を逍遙せり、

尊き生命を今日われらに返して、
 われらをして日光を見せしめよ」(二〇の一四)
 又ヤマは、妹のヤミーから頻りに戀を持ちかけられて居る。然し兄なるヤ
 マは、妹の切なる戀を退けて、戀に次のやうな歌を歌つて居る。
 「神々の謀者は常々こゝに在せり、
 身に休息なく、眼にも眼を閉ぢず、
 汝が腕は他人をこそ抱くべけれ、おゝヤミーよ、
 蔓草のかたく樹を纏ふごとくに」(二〇の一〇)
 血族結婚は已にこの時排斥せられてゐたらしい。かくてヤマ神に導かれて
 行つた死者は祖先の人々と共に最も高き天上美はしく繁茂せる樹陰に、ソーマ
 の酒を飲んで居る。乾酪の池、甘露の岸、酒あり、乳あり。みな蜜のやうに甘い。
 蓮華の池は美はしく圍繞してゐる。この祖先の住處は諸神の住處とは全く別
 に存在して居る。而して祖先の住處はヤマ神が支配して居るところから、これ